
銀クレ！ ストームを呼ぶ！ 歌ってUTAう!? ナルニアあかでみい

煉火赤駈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀クレ！ ストームを呼ぶ！ 歌ってUTAう！？ ナルニアあかでみい

【Nコード】

N1449G

【作者名】

煉火赤駆

【あらすじ】

>アバロン計画<への協力者としてナルニアキャラが>学園<を訪れていた折、ミカエル行方不明の知らせが>学園<に届く。ミカエルが消息を絶った場所は『銀魂』キャラがたびたび訪れる春日部で？ この小説では虹純晶さんの小説の世界観をお借りしたシェアワールド作品です。

プロローグ（前書き）

この小説は虹純晶さんの小説の世界観をお借りしたシェアワールド作品となっています。

虹純晶さんの小説を知らなくても読めますが、知っている方がより小説の設定を深く理解することができます。

プロローグ

どこかの暗い部屋の中に三つの影がたたずんでいた。

その部屋は、部屋の輪郭すらわからないほどに暗く、まるで闇そのものであるかのようだった。

「ミカエルの封印には成功なさったようですね」

影のうちの一つ、三つの影の中で最も小さいものが尋ねる。

「ええ」

尋ねられた最も背の高い影が答えた。

「次はいよいよヤツですか」

「そうね。ただ、ヤツをおびき寄せるためには、ミカエルに使ったのと同じだけじゃまだ足りない。もつと極上のエサが必要よ」

「しかし、ヤツへの最上のエサは>学長アスランくが握っているのでしょうか？ さすがに>学園アカデミーくを敵に回すと……。>連盟アライアンスくを事実上吸収して力をつけているはずですし」

「>学長アスランくから奪取するのが不可能なら、エサのほうから来るようにおびき寄せればいいのよ。……あなたがやってくれるわね」

背の高い影は黙っていた中ほどの背の影に呼びかける。中ほどの影は無言で頷いた。

「それより不安なのは、最近こっちに現れたらしい『銀魂』とかいう漫画の登場人物よ」

「心配には及びません。すでに策は打っております」

今度は小さい影が答える。

「どつやら準備は万端のようね。 > プロジェクト・ヴァーナス・システムス金星食計画 < 段階セカンド
始動」

プロローグ（後書き）

今回プロローグのみなので短いです。すみません。

今回は>学園<内であるナルニアキャラとまかでみキャラたちが遭遇します！

せっかくのシェアワールドなのに、クレしんと銀魂はもうちょっと

あとになりそうです；

すみません；

第一章 はじまり ー 第一節 幼女とギャルゲ設定は必然的に事件を引き寄せ

いよいよ本編開始です。

ナルニアキャラの口調が日本語訳本と微妙に違うかもしれませんが、「原書寄り」ってことでお茶を濁します。

第一章 はじまり ー 第一節 幼女とギャルゲ設定は必然的に事件を引き寄せ

「あの、すみません」

声をかけられて青年は振り返る。声をかけたのは碧の眼をした少女だった。それだけではどこにもある普通の光景である。と、言うより、声をかけられた青年も、声をかけた少女も 特に青年のほうは 「お前ら絶対狙ってやってるだろ」とツツコミを入れなくなるぐらい「普通」だった。

青年は大学生ぐらいの年で、その年代の日本人男子を全員足して人数で割ったような、とにかく身長、体重に限らず、成績、運動能力 などなど、全ての要素が平均値のような特徴のない青年だった。強いて言うならばどこか女性的な大人しげな顔が特徴だろうか。

他方、少女も碧の眼で目鼻立ちがはっきりしているが、特別美人でもなく、かといって特別不細工でもない、「外国人としては」いたって普通の少女である。こちらの特徴も強いて言うなら、二つ結びにした癖のある黒髪と、やや小さめな身長だろう。

この光景において唯一普通ではない部分、それはその会話が行われている場所だった。

それは一つの教育機関であった。

ただしそれはいわゆる学校教育基本法上の定めにも則って造られた組織ではない。そもそも社会通念や一般常識には縛られることのない領域にそれはあった。

この国の公文書の何処を探してもその機関の名前は記されていない。

この国のどんな地図を紐解いてみてもその機関の所在地は掲載されていない。

それは存在しないはずの機関。ありえないはずの組織。

なぜならこの教育機関が教えることは一般社会とは相容れないものであったからだ。人が人としての社会を営む上で切り捨ててきたものが堆積してできたものであったからだ。

だが捨てるものが居れば拾う者も居る。

そこは一般社会の常識からは見捨てられてきたものを営々と磨き上げてきた者たちとそれに続く者たちが学ぶための場所が。利便性。効率。経済効果。確実性。無味乾燥とした実利主義の陰で忘れ去られたはずの不可思議なる、しかし厳然たる真実を身につけるための場所だった。

故に関係者は様々な思いを込めてその教育機関をこう呼ぶ。

現代に隠れ住みし魔法使いたちの学園 >マジシャンズ・アカ
デミイ<と。

がすっ！

突然大きな音が響き、先ほどの開設を延々と読み上げていた長髪

の青年が頭から血を流してぶっ倒れた。

「な、なぜだあっ!?!」

青年はすぐに起き上がると後ろで槍のついたモップと言うか、モップのついたやりと言うか　を持つているメイドに向かって叫んだ。

長身瘦躯に切れ長の目、細い顎と整った顔立ちをしているが、顔の表面積の半分近くが流血でおおわれている時点で台無しである。まあ、最も彼の場合、最初からどこかに欠落があるというか、二枚目になりきれしていない部分はあるのだが。

「さすがに二次創作で形式十段落に及ぶ引用はまずいかと」

メイドは青年を諷めるような口調で言う。「メイド」と言っても秋葉原のメイド喫茶にいるような安っぽいメイドではない。その立ち居振る舞いから、いかにもメイドらしい気品があふれている。しかし、その漆黒の髪の間から同じ色の犬の耳が生えていたり、尻尾がついていたりするからには、人間ではないのだろうか……。

「そんなこと言ったって、二次創作とはいえどクロスオーバーだからな。他の作品は知ってるけど『まかでみ』は知らない人も読んでいるかもしれないし……」

「あー、先輩もエーニュースさんもさっきから何やってるんですか?」

物陰で行われている二人のやり取りに気づいたのだろう、最初の特徴のない青年　羽瀬川拓人が二人に言った。

「いや、ちょっと読者に説明をだな……まあ、いいじゃないか、そんなことは」

先輩と呼ばれた青年　さくまえいたろう佐久間榮太郎が茶を濁す。まあ、榮太郎がよく解らないことをしているのはいつものことなので拓人も深追いはしない。

その横でエーニュースと呼ばれたメイドが軽く会釈した。

「それより、そのロリっ子の話を聞いてあげなくていいのか？失礼だろう」

「初対面の女の子をロリっ子って表現する方が失礼だと思うんですけど……」

「あの、すみません！」

話題を戻そうと少女が声を張り上げた。が、その努力は次の瞬間無駄になった。

「みやああああっ！」

ものすごい勢い、それも一般的な全力疾走とかそんなものではなく、高速道路を走る自動車のような勢いで赤髪の少女が突っ込んできたのである。健康的な褐色の肌に、薄手のシャツにジーンズと言う軽装も相まって、赤道直下の国を思わせる。

「タクト！　その女子はなんなのであるか？　まさかフタバカズボとの間に隠し子が居たのであるか！？　それならせめて我にも

「トトトト……」

『そんなわけないでしょっ！』

そう書かれたホワイトボードが、赤髪の少女の後頭部を直撃した。どうやら何者かが投擲したらしく、ホワイトボードはそのまま床に落ちる。

そして、そのホワイトボードが飛んできた方向から、ノートに何やら書きながら眼鏡の少女がやってきた。背中にたらしめた黒髪の三つ編みの先には白いリボン。地味な、と言うより、実際今時の町中にこのような格好の少女がいたらかえって目立つだろうが、いわゆる記号的な意味で地味な少女である。

右手でホワイトボードを拾い上げつつ、左手では

『どう見たってこの子とタクちゃんの歳って五つぐらいしか違わないじゃない！　こんな大きい隠し子が居るわけないでしょっ！』

と、書かれたノートをさししめし、眼鏡の少女は「すみませんでしたっ」と二つ結びの少女に頭を下げた。慌てているように見えるが、ここまで来ると逆に器用である。

「タナロット先輩、御主人様とその女の子は今さっき会ったばかりですよ」

拓人のポケットに入っていたペンがポケットから飛び出し、人間の姿に変化した。長い翠の髪の、ほわほわした感じの癒し系少女である。機械の部品のような飾りが耳から生えている。

赤髪の少女、眼鏡の少女、翠髪の少女。順にタナロット・アンサーティン、羽瀬川鈴穂^{はせがわすずは}、ファルチエ・ザ・ヴァリアブルワンド。常に拓人のそばにいたので、学園では>拓人ガールズ<として有名である。拓人には学園外部に彼女が居るのだが、彼と学園外の交流のない者のほとんどは、拓人は彼女らのうちの誰かと付き合っているのだらうと思ひ込んでいるほどだ。

「えーと、あ、あの……」

で、その拓人ガールズの勢いに気おされてしまったらしく、黒髪二つ結びの少女は相変わらず要件を告げられずにいた。

「ああ、ごめんごめん。　　なんだっけ？」

拓人が慌てて聞き返す。

「用事で寒河江教授^{さかみ}の研究室に向かっていたんですけど、みんなとはぐれてしまって……」

「寒河江教授の研究室なら、ここからすぐだし、一緒に行こうか」

「なんだか面白そうだから、俺も行こう！」

拓人の発言に、なぜか榮太郎も同意する。

『何で先輩まで来るんですかっ！』

と、書かれた鈴穂のノート。

「フッフッフ……ロリっ子のいるところには何か事件が起きると相

場が決まっているのだ！」

「『』どの相場ですか』」

榮太郎の問題発言に拓人や鈴穂がツッコんでいるのは、学園内では日常風景である。

「と」ころで、そのロリっ子。名前を訊いてお」つ」

「ルーシィ・ペンシーって言います」

第一章 はじまり ー 第一節 幼女とギャルゲ設定は必然的に事件を引き寄せ

とりあえずルーシィとまかでみ組から入りました。

タナロットは予想以上に動かすのが難しいですね；

逆に鈴穂とか榮太郎は楽しかったです。

サブタイトルのつけ方はいろいろ迷った末、聖典風の章割りに銀魂流でつけることに。

第二節、普段人口密度が低い所に大勢いると別の場所に見える（前書き）

今回新キャラ大量に出ますが、今がそれぞれ個別に見せ場を作るので無理に全員覚えなくても大丈夫です。

第二節 普段人口密度が低い所に大勢いると別の場所に見える

寒河江教授の研究室は、これまでにないぐらい込み合っていた。

そもそもこの研究室は、白い何もない部屋の床やら壁やらが必要とあれば出っ張ってきて椅子や机などを形成する仕組みになっているのだが、椅子同士が連結している状態でないと全員座りきれないなどということはきわめてまれである。

その大人数のうち、拓人の知り合いは三人、いや、二柱と一人と言ったほうが正確だろうか。白虎の化身である白髪猫耳のメイド、ミヤビ。魔鳥の化身である赤髪のメイド、シンクラヴィア。銀髪の眼鏡をかけた男性、シュタイン教授。

ミヤビとシンクラヴィアは雑用のために来ているらしく、客人たちにお茶をだして回ったりなんかしていた。その二人にまぎれておそらく客人の一人であるにもかかわらず、一人の青年が食べ終わったお茶菓子の皿を下げたりしている。背の高い二十代後半くらいの金髪の青年である。もっとも、彼の場合金髪であることより服装が黒で統一されていることの方が印象に残る。雑用に無理やり付き合わされているといった風でもないのです、もともとそういった性分なのだろう。

シュタイン教授は客人のうち一人と何やら真剣に議論していた。議論の相手の青年は、肩甲骨の下ほどまであるボサボサの金髪をかきあげながら、懐から取り出したマッチで煙草に火をつけている。色素の薄いくすんだ藍白色の目と、大きな瞳孔のコントラストが気だるい雰囲気を出していた。議論の内容は、彼らがここに呼び出された理由と関係あるのだろうか。

「ただのケモノミミには興味ありません。この中にパンタグラフ萌えが理解できる人がいたら俺のところに来なさい！」

「何！？ ケモノミミに萌えないなんて、君はそれでも男かつ！？」

どうやらまったく関係なさそうだ。しかし、シュタイン教授のケモノミミ萌えは数々の事件を経て学園では有名になってしまっているが、「パンタグラフ萌え」と言うのもまたコアである。

そして、そんな二人の会話をいつ止めようかとおろおろしている黒髪を三つ編みに　こちらは鈴穂のように頭の後ろで一本にまとめているのではなく、二本の三つ編みを左右にたらしめている少女。大きなやさしそうな瞳の色はルーシイと同じ碧だ。親戚だろうか。

「ここで止めに入ったら帰ってまずいだろ。放つとこう」

と、三つ編みの女性をたしなめているのはやはり碧眼の黒髪の青年。アホ毛以外に外見上はこれと言った特徴はない。しかし、どことなく生徒会長的なカリスマ性を感じさせる雰囲気をもっていた。

その横で雑談している三人。右側に座っている男性は肩にかかるぐらいの金髪と言うよりむしろオレンジに近い色をした髪的青年。薄い白の布地のコートに、腰に差したカッタラスは、春に目にするやや季節はずれに見える。中央に座っているのは緩くウェーブしたセミロングの金髪の、気の強そうな少女。そして左側に座っているのは、黒髪で眼鏡をかけた気難しそうな少年。

（あれ？ この人誰かに似ているような　）

拓人はふと思った。そして、思い当った。

「御狩谷^{みかりや}はるかさんの弟さん？」

「御狩谷さんって誰ですか！？ 今日三回ぐらい聞かれたんですが」

違った。しかし違うのに三回も聞かれたとは、拓人の思い違いではなくよっぽど似ているらしい。

「あら、ルーちゃん。よかった、途中ではぐれちゃったから心配してたのよ？」

お下げの女性が拓人の後ろにいるルーシイに気がついた。

「おお、イヌミミが似合いそうなルーシイ君！ ちょうど今探しに行こうとしていたところだったんだ」

「いや、あなた今さっき兄貴と萌え要素議論してたでしょ」

余計な情報をつけたしてシュタイン教授がルーシイを呼んだ。ルーシイはビシリと切り返す。どうやら彼女も拓人と同じ重度のツッコミ気質の持ち主らしい。

「フッフッフ……。私にとってケモノミミはすべてに優先するのだ！」

「ところで、シュタイン教授。この人たちはいったい何なんですか？ シュタイン教授と寒河江教授だけならともかく、わざわざミヤビさんやシンクラヴィアさんまで手伝わせて接待するなんて……」

このまま放っておくとケモノミミについて小一時間語り続けそうだったので、拓人が慌てて話題を変えた。

「ああ、実は彼ら、学長の個人的な知り合いで、ちょっとしたVIPなんだよ」

シュタイン教授が少し声を落して言った。

シュタイン教授の紹介によると、シュタイン教授と議論していた青年はエドモンド・ペベンシー、三つ編みの女性がスーザン・ペベンシー、アホ毛の男性がピーター・ペベンシー（ルーシー含め、この四人は兄弟だそうだ）、御狩谷はるか似の青年はユースチス・クラレンス・スクラブ（先の四人のいとこだそうだ）、気の強そうな少女がジル・ポール、白いコートの男性がカスピアン、黒服の青年がリリアン（最後の二人は外見年齢に大差ないにもかかわらず、何と親子らしい）。名前を聞いて、拓人たちも自己紹介した。

学長が作った学園同様地図上にない世界　ただしこちらは学園に比べてかなり大規模　通称「ナルニア」から来ているらしい。かといって魔法使いというわけではなく（ルーシーとリリアンは多少の魔力を持っているらしいが）、ナルニア出生のカスピアンとリリアン以外はシフト・ポータル管理がかなり甘かったために迷い込んでしまった者だそうだ。

彼らは偶然魔法的な状況下に巻き込まれてしまった者に生じうるトラブルについての助言者として、>アバロン計画<に協力を申し出た。>アバロン計画<とは、魔法社会の中でランダムに選ばれた非魔法使いに暮らしてもらうことにより、一般社会と魔法の融和が

可能かどうかを調査する計画である。

「だから、くれぐれも失礼のないように気をつけてくれ」

「『イヌミミが似合いそう』とか『それでも男か』は失礼に入らないんですか」

「ところで、寒河江教授の姿が見えませんが、どうしたんですか？」

鈴穂がおずおずと訊いた。大勢いたのでわかりにくかったが、確かにこの部屋の主である寒河江教授は留守のようだ。

「重大な連絡が入ったとかで急いで出て行ってしまいましたけど、なにかあったんでしょうか？」

ピーターが答える。

「そんなに心配する必要もないと思いますよ」

拓人が言った。寒河江教授は機動ゴーレム部隊の指揮も行っている。学園にはいろいろと羽目を外しがちなものも多いので突然呼び出されるなんて日常茶飯事だろう。

「そうだ！ 寒河江教授が戻るまでこっちのコト、少し教えてもらえませんか？」

ジルが身を乗り出した。

「ナルニアとこっちで時間経過が違うみたいで、僕たちの体感時間としてはこっちを離れてから三年ぐらいなんですけど、こっちでは

六十年近く経ってるんですよ？ 今こっちの世の中がどうなってるかとも知りたいし 学園に来るようになってからは一応情報は入ってくるんですけど、どれから見ているのか」

と、説明したのはユースチスだ。拓人も以前時間の流れが違う異空間で修業した経験があるが、比較的短短期間だった上、移動先の世界でのほうが時間の流れが速かったため大きなギャップは感じなかった。そのため、共感はできないが五十七年間のギャップとは結構恐ろしいものではないのだろうか。

「結構慣れてますから。ただ、むこうとこっちの時間経過の差って流動的で、向こうの方が全然速かったりすることもあるんで、移動のたびにつかれちゃいます」

スーザンが笑いながら言った。

「ランダムですか、それはまた……」

「いえ、完全ランダムってわけじゃなくて、学長くがいじってるって噂ですよ。あまりに見事にこっちの長期休みと向こうのピンチがかぶるもので」

「では、この姿ではスペースを取りますので」

ファルチエが軽く白煙を上げて姿を消した。その場所に一本の杖が出現する。単純なように見えて、よく見れば細かい魔法回路が組み込まれているそれには、ファルチエの耳から生えていたものと同じ装飾が施されていた。

この杖こそが、魔法機杖ファルチエの本来の姿である。しかし、

魔法機杖としては小型とはいえかさばるので、学園内では人間の姿で自分で歩き、学園外ではボールペンなどに擬態していることが多い。ファルチエが杖の姿なら何とか残りのメンツは部屋の中におさまりそうだ。

「でも、こつちの世界の事って言っても何から話したらいいのか…
…質問とがありますか？」

「じゃあ、鈴穂ちゃんとタナちゃんのメールアドレスから」

カーンっ！

拓人の質問に悪乗りしたりリアンに、カスピアンがカッツラスを投擲した。この混雑下で狙った対象にだけ命中させられるのは、やっぱり慣れていいるからだろう。

『大丈夫ですか？ 刺さってますけど』

「コイツ純血の人間じゃないんで、人間の回復力の基準で見ないでいいですよ」

「いや、普通の人間と同じように痛いんですけど！ ちょっと、父さん？」

心配してノートを示す鈴穂に、カスピアンが解説した。もっとも、本人は頭から血をダクダク流しながら否定しているが。

その時、突然ドアが開いた。ドアの外に立っていたのは、金髪碧

眼の美少年。この部屋の主、寒河江教授
ている自動人形オートマタである。

正確には彼が普段使っ

「 すまない。急用ができてしまった。>アバロン計画<につい
ての会議は延期させてもらえないか?」

寒河江教授は開口一番そう言った。

第二節〜普段人口密度が低い所に大勢いると別の場所に見える（後書き）

さて、とりあえず今回使うナルニアキャラは全員登場　　いえいえ、
実はまだまだいたりします。

次回からはいよいよクレしんキャラが登場。

銀魂キャラは……あとちょっと待ってください（汗）

第三節 事件の裏には他の事件がある

「教授、急用っていったい何があったんですか？」

拓人が尋ねる。>学園<はそれほど上下関係にうるさくないといえ、やはり>学長<の個人的な知り合いと言えば十分なVIPである。それに、>アバロン計画<に関する会議も相当重要な部類に入るはずだ。それを延期してまでの急用となるとおのずと重大な事件に限られる。

「みゆつ。そうなのである。教えるのである。インフォームド・コンセントなのである」

「タナ郎、意味解って言っていないでしょ」

寒河江教授はしばらく考えていたが。

「……そうだな。君たちは例の>連盟<との一件で実践についていえば一部の教授をしのぐ実力がある。話してもいいかもしれない」

「実践ですか……？」

不安げに拓人が確認する。どうやら、あまり安全な話ではないらしい。

「なんだかわからないですが、僕らにも手伝わせてください。実践経験なら十分ですし」

ピーターが身を乗り出す。

「し、しかし、君たちはをあまり大きな騒動に巻き込んだら、学長くが……」

「今まで僕たちを一番騒動に巻き込んできたのは、学長くですけど」

ユースチスが眼鏡を押し上げながら言った。

「どうやら、ロリっ子のいるところに事件は起きるといっ俺の直観はあたりだったみたいだな。俺も混ぜてくれ……と言っか勝手に混ざる！」

と、こちらでは榮太郎えいたろうが勝手なことを言っている。

「わかった。まずはこれを見てくれ」

寒河江教授が指をパチンと鳴らすと、天井から白い淵のテレビ画面が生えてきた。画面には一人の少女が映し出された。>学園<のホストコンピュータとしてデータ上に作られた仮想神格の少女、トリンシアである。

「トリンシア、例の映像を頼む」

「了解しました」

寒河江教授に頼まれたトリンシアが頷くと、パツと画面が切り替わった。

画面中央にはそれほど高くない山が映っている。周囲にある家の中に日本家屋が含まれていることを考えると、日本国内のどこか、

家の密度から見るに都市近郊といったところだろうか。しばらくすると、その山から突然大きな音が上がり、土砂崩れが始まった。

「あつ、この映像、テレビで見たことがあります」

拓人が言った。このニュースは、結構前のものだったはずだが、自宅でタナロット、鈴穂、ファルチエとともに見た記憶がある。テレビで見たものとは撮影角度が異なるが、どこか別の位置に学園専用の観測カメラでもしかけられていたのだろうか。

土砂が山のふもとにある民家を飲み込もうとした瞬間。土砂を押しとどめるかのように、虹色の壁が出現した。さらにそれに続いて巨大な銀色の盾が虹色の壁をバックアップするかのように支える。最後には金色の剣が山に突き刺さり、崩れかかった土砂は嘘のように静止した……。

さすがに>学園<関係者はこの程度の超常現象には慣れているので、映像事態を否定する意見は出なかったが、それでもこの中では超常現象に対する耐性が薄いと思われるユースチスは口をぽかんとあけていた。

「この現象、>学園<が記憶操作に回っていないことを考えると>学園<は無関係だと思っていたんですが」

拓人はやっぱり関係があったのかと問おうとしたが、シユタイン教授がそれを遮った。

「いや、この現象は魔法ではなく、いわゆる超能力の類によるものだ」

「超能力にもいろいろな種類があるんですね」

「ユースチスさんも超能力者に会ったことがあるんですか？」

感心しているユースチスの口ぶりから拓人が尋ねる。

「いや、会ったことがあるというか、僕自身どうやら一種の超能力者だったみたいで……」

「えっ」

拓人は驚いた。拓人として知り合いの超能力者は数名しかいないが、超能力は魔法と違い基本となる体系がほぼ存在しない分、修業は自分の力を信じて独学でやる他にない。そのため、超能力者と外から見えてわかるほどの者は相当の自信家が多いはずだし、現に拓人の知り合いの超能力者はいずれも自信家だった。しかし、彼ももちろん自信家の要素は少なからず持っているのだが、何と云うのだろうか、少なくとも自分の能力に対する自信は人並み外れて高いようには見えない。

「僕だつて驚きましたよ。能力だつて今まで一度しか発現したことがないですし。わかつたのはつい最近、学園に出入りするようになって調べてもらつてからです」

「最初ん時はむしろ俺、被爆かなんかかと思つたぜ？ そーゆー特撮あつたし」

ユースチスの説明に、エドモンドがとんでもないことを付け加える。

被曝と間違う超能力とはいったい何なのか、おそらく全員気になつただろうが聞くのが恐ろしくて誰も口にしなかった。

寒河江教授は話を続ける。

「もちろん、超能力者のトラブルであれば、本来、学園が関与する必要はないのだが、この事件を含め、こここのところこの地帯埼玉県春日部市では大規模な人災が多発していることが明らかになった。ただの偶然でこれだけ大きな事件が一つの市に集中するはずがない。そう思った我々は現地で秘密裏に調査を開始した。その結果、先ほどあることがわかった」

「この地帯に、六副官級以上の魔が存在している」

同時刻。埼玉県春日部市。一人の子供が道を歩いていた。まだ一人で出歩いているところを見ると思わず「お母さんは？」と尋ねたくなってしまうほどの年頃である。太く大きな弧を描いた弓型の眉毛に大きな目、しまりのない口元と、なかなか個性的な顔立ちをしている。

彼の名は野原しんのすけ。友達の佐藤マサオと公園で遊んだ帰りだった。土曜日の今日、会議を控えた父ひろしは午前中のみ仕事に出かけていて、母のみさえは妹のひまわりを定期健診に連れて行っていたので一人で公園に出かけたのだ。そろそろ全員自宅に帰っている時間だが、書き置きには「こおえんでマサオくとあそんでくるね」とだけしか書いていなかったので、迎えにこようにもどこの公園だか家族も解らないのだろう。

「んもあ、おむかえにきてくんないなんて、かあちゃんひどいゾ！」

明らかに自分の書き置きに比があるのに、そんなことに気づかないしんのすけは、ぼやきながら家に向かった。

途中、しんのすけは大通りの脇のゴミ捨て場に捨てられている成人向け雑誌に目をとめた。いわゆるませた子供であるしんのすけは、そういった情報に興味を持っているのだ。大人並みに鼻の下をのびしながら、それらを束ねている紙テープをちぎり（そろそろ夏なので近くの家が打ち水でもしたのだらう、水にぬれてもろくなっていたテープは簡単にちぎれた）、雑誌を広げる。

「お？ このほんだけ きれいなおねいさんがいないゾ！」

明らかに他の雑誌と雰囲気の違いを見つけ、しんのすけはそれを拾い上げる。真っ青な表紙に金色の塗料で描かれた題字は、外国語のようで、しんのすけには読むことができなかった。

このときしんのすけは、見落としていたのだ。自分の足元にチョークで描かれた魔法陣と、その周囲に設置された七色の宝珠を。

第三節 事件の裏には他の事件がある（後書き）

さて、いよいよしんのすけが登場です。

確か超能力「デイリ・アホーウでよかったですよね……？

次回も多分説明的な話になると思います。

ストーリーが思うように進まない：あうあう：

第四節 重要人物はたいてい行方不明

「六副官級以上の魔ですか？」

確認しながらも、拓人^{たくと}はそれほど驚いてはいない。神族に比べて序列はやや混沌としているが、魔族における「六副官級」と言えば神族で言う「織^{セツ}天使級」程度。織天使級の天使であるガブリエルやミカエルなども面識がある拓人^{たくと}にしてみれば、六副官級以上の魔がこちらに来ているといわれても特別大事件という感覚ではないのだ。

「問題はその六副官級以上の魔が、能力をほとんど開放しきった状態でこちらに滞在しているということだ」

これにはさすがに拓人も驚いた。神族や魔族が力をすべてこちらの世界に持ってきてしまおうと、ただその場に立っただけで奇跡や災害を引き起こしかねないのは魔法について多少なりとも知識がある者にとっては周知の事実だ。先述のガブリエルやミカエルも能力のほとんどは神界においてきているし、拓人が手違いで『造つて』しまった魔神であるタナロットも手や足に巻いているアクセサリーで魔力の発散を防いでいる。それにもかかわらず、能力を全開放状態で人間界にやってくるということは、何かしらの目的があるはずだ。

「何のために、と言うことが問題になってくるんでしょうか、やっぱり」

「うむ。もちろん魔界にも連絡はとったのだが、まだ例の>連盟<の件の後始末で忙しいことも神界に比べて統制が甘いこともあり、

どの魔が原因かはわからなかった。しかし、その代りに興味深いわさが最近、魔界で流れているという情報が入った」

「もしかしてその噂って……」

つぶやいたエーネウスのイヌミミがぴくんと動いた。

「何力思いあたる節でもあるのかシラ？」

微妙におかしいイントネーションで、シンクラヴィアが尋ねる。

「ええ。前回デスキンの交換で魔界に戻った時に小耳にはさみしました。その時はただの噂話と思って気にも留めなかったのですが……」

ちなみに、デスキンとは彼女が持っているモップ型の武器であり、モップの反対側についている武器部分が毎月違っているのは、月に一度魔界まで交換に行っているかららしい。

「まさか本当なのですか？ 『青い秘術書』が埼玉県春日部市で発見されたというのは」

寒河江教授は頷いた。

「何ですか？ その『青い秘術書』って」

拓人が訊き返した。

「『アッピンの赤い本』と『エメラルド・タブレット』については、

君も聞いたことがあるだろう」

寒河江教授は説明を続ける。アツピンの赤い本は魔術、エメラルド・タブレットは錬金術におけるすぐれた書物の名で、一般社会ですらある程度認識されているほど有名だ。

「この世の中にある全てのものは、神魔、地火風水などのようにいくつものもので対をなし、支えあっているという説が存在する。その説が正しいと仮定したときに、これらの書物と同時に存在するという仮説が立てられているのが『青い秘術書』だ」

『光の三原色！』

鈴穂がノートを掲げた。「三原色」をちゃんと赤・青・緑で書いているあたり芸が細かい。

「うむ、『赤』『緑』と釣り合うとされているのは同じく光の三原色である『青』。赤い秘術書である『アツピンの赤い本』、緑の秘術書である『エメラルド・タブレット』のほかに『青い秘術書』が存在するという説が生まれたのだろう」

確かに、魔法において色はかなり重要な位置を占める。東洋の風水術などに影響が顕著だが、西洋魔術においてもある程度技術が発展する前は治療魔法を使う者はその効果を高めるために白い衣装を身に纏うことが多かった。現在も医者が病院内で白衣を着ているのは、単に衛生面の問題だけではなく当時の名残でもある。鈴穂のよくなぐ魔力侵奪能力者が能力を発動させた時、髪の色が蒼く変化するのもその系統の事象だ。

「もちろん、仮説に過ぎないので、学園側もただの噂だろうと見過

「ごしてきたが」

寒河江教授は言葉を切った。

「インターネットでその情報を仕入れ、興味本位で調べに行ったミカエルがそのまま行方不明になってしまったのだ」

「えっ、美夏さんが!？」

これには拓人も驚いた。鈴穂も『!？』とめいっばいに書いたノートを頭上に掲げている。

ミカエル　こちらの世界では美夏^{みか}という偽名を使っている
の實力は、拓人もよく知っている。ちよつとした勘違いから、一度彼女が率いる天使の一団と戦うことになってしまったことがあるのだ。直接手合わせをしたことはないものの、その下にいる軍団だけであればの實力なら、本人の實力も予測がつく。

そう言えば、彼女の彼氏であり拓人たちの友達である霧島葉月^{きりしまはづき}が、最近美夏と連絡がつかないんだが、嫌われてしまったのだろうか。云々と泣きついてきたことを思い出した。天界にはお忍びで人間界に来ているとはいえ、織天使級の神族ならそれなりに忙しいのだから、気にも留めていなかったが。

「やっぱり、織天使級の美夏さんに対抗できるとなると、その六副官級以上の魔が動いたんでしょうね……」

寒河江教授は無言でうなづく。

「公に目的を告げずに『アップルの赤い本』『エメラルド・タブレ

ツト』と同等の秘術書を六副官級の魔が探しているとすれば、何かしらの企みが絡んでいる可能性が高い。それで、学園が調査に回らねばならなくなったということだ。もちろん、相当の危険が待ち受けていると思われるため、協力はそちらの任意ということになるが……」

ダンッ！

寒河江教授が話し終える前に、エドモンドが机をたたいた。

「面白え、協力させてもらおうじゃねーか！」

「俺の場合、拒否してもどうせ後から強制的に協力させられそうだしな」

セリフとは裏腹に向こうが拒否しても面白そうだから無理やり参加するオーラを出しながら榮太郎えいたろうが言った。

「みゅっ！ 我也行くのである！」

遠足にでも行くかのような調子でタナロットも賛成する。

「僕も行きます。美夏さんのことも気になるし」

拓人も言った。タナロットだけで行かせるとかえって周りに迷惑をかけたりしそうで不安。何しろ、見た目は自分と同じぐらいの歳とはいえ彼女はまだ二歳数か月の子供である。というのもあるが、>連盟<との抗争が終了し、試験でない実戦で自らの実力を試せる機会が急激に減ってしまったので、そろそろ試してみたくなくなったというのも理由の一つだ。

もちろん他の分野に関しては学園の試験もあるが、>連盟くとの抗争での経験値ゆえか、破壊魔デモンヨリナーと呼ばれた叔母の血筋ゆえか、いつの間にか拓人の得意分野は物騒なことに実戦になっていた。

それに、危険と言っても、先輩がいれば大丈夫　　そう思わせてしまふ雰囲気デモンが榮太郎にはあるのだ。

「　くだらない。ひとりひとり聞く意味はもうないでしょう。どうやら全員で行くことになりそうですよ」

ユースチスが前髪をかきあげながらため息をついた。

第四節 重要人物はたいてい行方不明（後書き）

うーん、私の腕でまとめるとまかで見は中二臭が抜けないっ！
ユースチスの「くだらない」は彼の口癖の「rot」の和訳のイメージです。

第五節　ジャンプもりぼんも集英社

「さて、ここからはバラバラに探したほうが早いだろ」

春日部市内路地裏のシフト・ポータルから出て、榮太郎が言った。

寒河江教授とシユタイン教授学園内から指揮を執ることになっている。
いる。

「じゃあ、僕はあっちの方を探してみます」

「あ、ユースチス。ちょっと待ってくれ。そう言えば、シユタイン教授から渡すように頼まれていたものがあつたんだ」

先に行こうとするユースチスを、榮太郎が呼び止めた。

「シユタイン教授から……？　何でさつき渡さなかつたん」

聞きかけたが、その品物に「エドモンド君と萌え談義に夢中になつて渡し忘れた。スマン」と書かれた紙が貼つてあるのを見てやめた。

手紙をはがして、品物をよく見る。金色の少し大きめサイズの腕輪だ。

「その腕輪つてもしかして……！」

思い当たる節があるのか、エドモンドが割って入る。

「ああ。カスピアンが持つてきた腕輪にユースチスの超能力を作動させるための術式を組み込んだものらしい」

「超能力を作動させる術式!? そんなことができるんですか!？」

拓人が尋ねる。超能力は科学はもちろん、魔法に比べても個人別に能力の違いが大きく、また、技術体系も大幅に違うために魔法で能力をどうこうするということは不可能に近いはずだ。

「普通は無理なんだが、なんでもある島の磁場が偶然彼の能力を強める術式の代わりになっていることが明らかになって、その術式を解析、小型化してさらにいくつかの機能を付加して腕輪に組み込んだらしい。詳しい話はこれが終わったらシユタイン教授に訊いてくれ」

「ありがとうございます。まあ、あの能力を使わなきゃいけない機会なんて、そうそうあるとは思えない」

ユースチスが言いかけた時、突然ユースチスの掌の上から声が聞こえた。

「— & amp; # 2 0 3 2 0 : 好!^{二一八オ}」

「えっ?」

まさか掌の上から声がするわけないとあたりを見回すが、その声の主らしき人は見当たらない。

「こっちでしゅ、こっちでしゅ」

聞き間違いではない。やっぱり手に持っている腕輪から声が発せられている。

「……まさか、しゃべるの?」

「はいでしゅつ。んしょつとー!」

ユースチスの問いかけに答え、腕輪は光を放った。ユースチスはその光のまばゆさに目をつぶる。光がおさまって目を開くと、手の上には身長七八センチの答申少女が立っていた。額にある緑の寶石が腕輪に埋め込まれていたものと同じなので、腕輪の精霊であることは容易に想像できる。

「どづだ、かわいいだろう。」
「Latest model of Individual Metaphysical ability Encourager (最新型対個人非体系的能力増幅装置) 略してLIMEちゃんだ!」

「明らかにパロ元ネタがあつて後から正式名称を決めましたね」

「>アバロン計画<のアジャスタントの試作機も兼ねるという事で、自立起動システムが組み込まれている」

エーネウスのツッコミをスルーして、榮太郎が説明を続ける。ユースチスはそんな様子を見て、頭を抱えた。どうやら突っ込んでも無駄であることがわかる程度の経験値は積んでいるものの、すぐに事態を飲み込めるほど柔軟な思考回路の持ち主ではないようだ。

「えーと、では、主人。^{ましゅたー}よろしくお願いしましゅ」

「……一応、学長くにはそれなりの恩があるし、アジャスタントの試作なら断るわけにもいかないか。しょうがない。なににせよ、秘術書の件を早く片付けないとな。行くぞ、LIME」

ユースチスはLIMEに罪はないと笑いかけるも、やっぱり眉間にしわが寄っていた。

「そうだな。俺はイーネとあっちの方見て回るから、拓人とファルチエはユースチスと同じ方向に行ってくれないか。LIMEとユースチスのデータが必要だからファルチエに記録しておいてほしいんだ」

「わかりました。じゃあ、またあとで」

榮太郎とイーネウス、拓人とファルチエが順に路地裏を去る。

「じゃあ、兄さん。俺たちは駅方面行こうか」

「お前は駅が見たいだけだろ……！」

「とりあえず、ここで解散だな」

残りのメンツもぞろぞろとバラけていった。

第五節くジャンプもりぼんも集英社（後書き）

つまり打ち切りがひどいってこと（笑）<タイトル

L I M Eの元ネタはアレです。

りぼんの方の「ドラゴン ール」です。

シュタイン教授は同時期にケモノミミ死神が出てくる漫画が連載中
だったから知ってたんだよ。うん。

第六節　黒は紫外線を通しにくい（前書き）

いよいよ銀魂キャラ登場です。

お待たせしましたっ；

第六節　黒は紫外線を通しにくい

「かあちゃんただいまー」

「おかえりしんのすけ。ちゃんと手洗いなさいよ？」

野原家のほらに帰宅したしんのすけは、靴を適当にポイポイと脱ぎ捨てると、みさえの忠告も聞かずに真っ直ぐにみさえのもとに向かった。ちなみに、みさえの横ではベットの中型雑種犬シロとひろしが仲良く昼寝している。

「もう、駄目じゃない。ちゃんと手洗わなくちゃ」

「たあーい！」

みさえがしんのすけに向かって口をとがらせていると、みさえの膝の上にいたひまわりが勢いよくしんのすけが手に持っていた本に飛びついた。母に似て光モノが好きなひまわりのことだ、表紙に金で書かれた文字に興味をひかれたのだろう。

「あ、コラ、ひまわり！　しんのすけ、何なのよ、その本」

「かえりにごみすてばでひろったんだゾ！」

「もーっ、ゴミなんか拾ってきちゃ駄目じゃない！」

「でも、きれいなおねいさんのほんにまざって、えいこのほんがすてであるなんてヘンだゾ！　だからもしかしたら、なにかにかんけいあるんじゃないかなって」

「確かに、それはちよつと変ね」

みさえは考え込んだ。ちよつと前までなら怒って取り上げてまた捨ててきたところだが、リオルの件では何でもなさそうな石が重要な力ギだったりしたのだ。それに、しんのすけは意外に感がいいところがある。

「それに、この字、英語じゃないわよ。こんな字、見たことないわ！」

お世辞にも英語に堪能とは言えないみさえだが、アルファベット二十六文字ぐらいは覚えていて。ギリシャ文字やハンゲル、アラビア文字なども読めないなりに、おぼろげに文字の種類ぐらいいは見て判断できるつもりだ。しかし、その表紙に書かれている文字はいずれのものとも異なっていた。

「うーん。私が知らないぐらい遠くの国の本なら、捨てたりしないでオークションにかけたりするだろうし、ドン・クラーイの文字か、『銀魂』世界の宇宙文字とかじゃない？ でも、どっちにしろ、こつちのゴミ捨て場なんかに捨ててあるのは変ね。ドン・クラーイには連絡がつかないかもしれないけど、銀さんたちに相談してみたら？」

「ほほーい。おっと、けいたいはでんちがきれてたんだっけ」

しんのすけは軽く返事をする、幼稚園の連絡網を見ながら誰かが居場所を知らないかと連絡を回した。

「さて、探すといっても秘術書なんて、どこから探しているの

やら」

リリアンは途方に暮れていた。バラバラに分かれて探したほうが効率がいいと別れたものの、てんで見当がつかない。

本を探すなら図書館や書店だろうが、おそらくほかのグループが検討をつけているだろうし、第一そんなところに秘術書があったらすぐに話題が広がるだろう。

落し物として交番に届けられているかもしれないが、青い本であること以外の情報なしに引き渡してもらうのは難しいだろう。いや、秘術書が青い本であるということ自体『アツピンの赤い本』や『エメルルド・タブレット』と比較した際に産まれた仮説でしかなく、実際に青いのかということ自体怪しいのだ。

思考をぐるぐると廻らせながら、リリアンは全身から大粒の汗がにじみだしていることに気がついた。ずっと以前のこととはいえ、十年以上太陽の光から離れていた後遺症だろうか。相変わらず、暑さと紫外線は彼の大敵なのだ。

「とりあえず、屋内に入らないことには頭もうまく働かない　か」

適当に飲食店らしき店を探し出す。しかし、下がっている札が「営業中」なのか「準備中」なのかわからない。>学園<に入場した際に借りた翻訳術式つきの指輪のおかげで会話には不自由はないが、文字は相変わらず読めないのだ。学園内の標識類は見る者の母国語に自動翻訳される特殊文字で書かれたものがほとんどだったので苦勞しなかったが、そんな魔法クオリティーを一般店舗に求めるわけにはいかない。

誰かに訪ねるべきだろうか。しかし、あんまり流暢な日本語で質問するとかえって怪しいか。そう思っていると、その脇をすり抜けて一人の男性が店に入って行った。長い黒髪も顔のパーツもきれいに整っていて、なかなかの美男子である。何故か白い和服を着ていた。

(よかった、開業中か！)

そう思ってから入ろうとドアの方を向いた瞬間、巨大な白い何かがリリアンの目に飛び込んできた。

背は二メートル強、やたら間の抜けた目とくちばし、短い手やひれのついた足などのフォルムがペンギンを思わせる。手でドアを自分で開けているところを見ると、生き物なのだろう。敵意どころか何の思想も感じられない間抜けな生命体なのだが、いきなり目の前にいるとそのサイズ故にどこか威圧感を感じてしまう。

(こっちの世界の愛玩動物か何か……かな?)

少し尻込みしながらも、その生き物に続いて店に入る。すでに五歳ぐらいの子供を連れ夫婦が店内にはいた。何気なくリリアンがカウンター席に座ると、リリアンの前に店に入った男はその隣の席をとった。さらにその隣に不思議生物が座る。

男は、周囲には聞こえない低く落とした声で、リリアンにこう言った。

「貴様、何者だ」

彼の鋭い視線が刺さる。

「何のことでしょうか？ ただの観光客みたいなものですけど」

「とぼけるな。ただの観光客がそんな黒づくめの恰好で住宅街をうるつくか。A P T X 4 8 6 9でも持っていそつに見えるが」

それを言ったら和服に長髪と言う男の恰好も不自然なのだが、それを指摘できるほどリアンにこちらの世界の常識は身につけていなかった。

「ボ、桂^{かすい}さんこんにちは」

突然椅子の下から声がした。奥の家族席で両親と食事をしていた男の子が、いつの間にか近くに来ていたらしい。目や鼻や口など、顔のすべてのパーツが全体的に小さく、その上青つ洩を垂らしているので、どうもボーっとした印象だ。どうやら長髪の男 桂というらしい の知り合いのようだ。

「おお、ボー。居たのか」

「うん。おかあさんとおとうさんときてただけど、桂さんがきたから、せつかくだから桂さんと、おはなししながらたべたらって」

その時、外で爆発音が響いた。

青い秘書書を取り合って敵と戦闘を繰り広げる仲間の姿がリアンの脳裏に浮かぶ。

「 ! まさか、『青い秘書書』が ! 」

「……今の音は、バズーカか？ 詳しくは知らないが、『青い秘術書』とやらはどうやら関係ないぞ。おおかた、真選組しんせんぐみの連中が喧嘩でもしているのだろう」

「ばずーか……？ そ、そうですね」

それはそれで結構一大事なのだが、バズーカが何物か知らないリアンは桂の口調から「大したことはないんだな」と予測した。

「でも、それにしては何か……いやな予感が」

第六節 黒は紫外線を通しにくい（後書き）

ってことで、銀魂キャラ初登場はヅラです。
理由？ 好きだから。

で、この話を書いて分かったことが一つ。
ヅラって意外に動かしにくい。

第七節 男対女で男が強いとは限らない

その頃、店の外では桂かつらの予想通り、江戸の武装警察真選組しんせんぐみ一番隊隊長の茶髪美少年、沖田総悟おきたそうごがバズーカをぶっぱなしていた。

しかし、バズーカをぶっぱなされている相手は真選組のメンツではない。なんと、羽瀬川鈴穂はせがわすずほだった。いや、正確には鈴穂ではない。三つ編みにしてあった髪はほどかれ、紺碧に染まっている。彼女は鈴穂が魔力侵奪能力を発動したときに出現するもう一つの人格、羽瀬川鈴果すずか。

そして、その二人の脇で、日本刀と弓矢で激しく戦闘を繰り広げているのが真撰組局長のゴリラ似のおっさん近藤勲こんどういさおとスーザン・ペンシー。

なぜこのような状況に陥ったのかを説明するならば、話は数十分前にさかのぼる。

「しかし、毎度毎度こっちとあっちを往復じゃ疲れますねイ」

「まあ、そう言うな。こっちで息抜きするのもいいもんだが、向こうの世界の仕事もサボれんだらう」

沖田と近藤は通りを歩いていた。

実は、彼らもこの世界の住民ではない。

魔虞蛇博士まぐたという人物の発明でこちらの世界とつながってしまった漫画『銀魂』の世界の住人なのだ。こちらの世界でさまざまな事

件に巻き込まれたりしているうちに、すっかりこちらの風景にもなじんでしまったが、やはり『銀魂』という漫画自体幕末の日本に黒船の代わりに宇宙人が襲来したというトンデモ設定の漫画なので、その世界の住人が完全にこちらの世界に溶け込むのは不可能である。

「しかし、今は向こうよりこっちの方がヤバイんじゃないですか？ 最近子供相手の人攫いが出るとか、小耳にはさみやしたけど」

ちょうどその頃。同じ通りを反対側から、鈴穂とスーザンが歩いていて。

「それじゃあ、鈴穂さんは昔失語症を？」

「ええ、もう治ったんですけど、急いでる時とかは、まだついついノートとホワイトボードのほうに先に出ちゃって……私もスーザンさんみたいに大家族だったらもうちょっと社交的な性格になれたかしら」

もちろん、鈴穂だって今は拓人やタナロット、ファルチエと同居しているし、鈴果だっている。しかし、スーザンのように最初から大勢の兄弟に囲まれて育ったらどうだっただろうかと、ついついな物ねだりをしてしまうのだ。

「大家族もいろいろ大変ですよ？ 特にエド君は昔から手がかかって……」

そして、その二組が正面からばったり出会ってしまったのだ。

「ん？ なんだ、お前らは」

「このあたりじゃ見ない顔でさア」

と、言う近藤は刀、沖田はバズーカを所持しているわけで。

「あらあら」

『な、何！？』

と、言うスーザンは彼女の得意武器である弓矢に矢筒、（こちら
は書いているのだが）鈴穂はかなり変わった形の鞆（中には機剣>
ワルプルギス<と>アイギス<が入っている）を持っていたりする
わけで。

戦闘が勃発するのは当然のことだった。

「明らかに、怪しいな」

近藤が刀を構えた。

「怪しいのは」

鈴穂は髪を結んでいた白いリボンをほどく。三つ編みに束ねられ
ていた髪はすると自然にほどけ、そしてまるでCGか何かのよ
うに蒼に染まっていく。

「お前らの方だろうかっ！」

鈴穂 いや、鈴果は鞆の中から>ワルプルギス<と>アイギス
<を取り出すと、勢いよく沖田に切りかかった。相手が『六副官級
の魔』だと思っていた鈴果は、バズーカから射出されるのはおそら

く>魔弾カスバルの類だと予測したのだ。見た目がまだ若い少年である以上、カウンター・ウェイトが少ないのだから実弾のバズーカを打つより、実態を持たない>魔弾<のほうを打ってくるのだろうと。そして、鈴果が魔力侵奪能力を発動させていれば、威力を（六副官級相手に完全に吸収できないかもしれないが）ある程度軽減できる。

しかし、その予想は外れてしまう。沖田は（当然魔法の知識を持たないので>魔弾<など打てるはずもなく）サッカーボール大の実弾を打ち出したのだ。

「もらった！」

とつさにアイギスのシールドを発動させてなんとか直接のダメージは防いだが、かなりの衝撃が腕に伝わる。

一方、その二人の脇で近藤とスーザンが戦闘していたが、お互いに相手になかなかダメージを与えられずに苦戦していた。近藤は武装警察の局長である上に、日頃ストーカーで体格の大きさをカバーするだけの素早さを身につけていた。しかし、武器が刀である以上、リーチの長い弓矢の射程から離れてスーザンに切りかかることは不可能だ。

「鈴穂さん、その髪、もしかして……」

「ああ、>魔力侵奪能力<くだ！ それから、アタシは鈴穂じゃない！ いろいろ事情が複雑なんだが、アタシは羽瀬川鈴果、覚えておきな」

戦闘の手を緩めずに、スーザンと鈴果が会話をする。

「解りました。鈴果さん、一旦能力封印していただけませんか？」

「あ、ああ……」

スーザンがなぜそんな提案をするのか鈴果には解らなかったが、相手が実弾を使っている以上、魔力侵奪能力くを発動させ続ける意味はない。鈴果は髪のリボンを元に戻す。

「ありがとうございます」

スーザンは矢を放った。一本、二本、三本。先ほどと同じように、近藤はそれを交わす。

「へっ、どうした？ さっきと変わらねえじゃ」

「近藤さん、危ねエ！」

沖田が突然近藤の背後に向かってバズーカを放った。

「うおっとと、何すんだ、総悟！」

近藤が前にのけぞりつつ振り返ると、そこにはバズーカで破壊された三本の矢の残骸が残っていた。しかし、矢じりが何故か自分の方を向いている。

『ホーミング
追尾く術式！』

書き示し、鈴穂は首に下がっているペンダントに触れた。すると、鈴穂の姿がブレはじめ、すぐに二つに分裂した。鈴穂と鈴果は時間や互いの距離などの制限つきだが、ペンダントに組み込まれた

術式によって二人に分裂することができるのだ。

「魔法戦じゃないなら、こっちの方が有利だよな」

「へエ、面白エ」

沖田はつぶやいた。

第七節 男対女で男が強いとは限らない（後書き）

個人的な一押しキャラの鈴果がいよいよ登場しました。

しかし、虹純晶さんの本編も合わせたら、

二重人格の人口密度が半端ない世界に；

次回からいよいよ銀さんが登場します。遅くてすみません；

第八節　主人公はつらいよ

その頃、駅前商店街では。

「ほあちゃーっ！」

とかなんとか叫びながら襲い掛かってくるチャイナ娘から、ミヤビとシンクラヴィアが必死で逃げていた。

「ねエ、アの娘、何デ襲い掛かッテくるのかシラ？」

「知らないわよ。メイド服の二人組が秋葉原以外の町をうろついていたら怪しいと思うところまではわかるけど」

「チャイナ服の娘も同じくらい怪しいト思っケド」

「何をゴチャゴチャ言ってるアル！　さてはアンタら、噂の人攫いアルネ！　トオルは渡さないアル！」

そう言いながら傘を振り回している（今となっては珍しい蛇の目傘だ）。「チャイナ娘が傘を振り回している」という説明だけだとむしろ微笑ましい光景だが、その振り回した傘が当たった地面のコンクリートが陥没しているのを見るとのんきに微笑んでいる場合ではない。しかも、さらにその後ろから巨大な白い犬が猛然と迫ってきていたりする。

「っていつか何なの？　あの子。普通の人間とは思えないけど、魔力値も神格値もそんなに高くないわよ」

「さア、あたしに訊かレテも」

「とにかく」

今のミヤビとシンクラヴィアは事情があつて榮太郎により能力のほとんどを封印されているため、まともに向き合つても勝てる可能性は低い。となれば、

「合流して、能力を開放してもらうしかないわね！」

「わちやあああつ！」

チャイナ娘の一撃が新たなクレーターを形成した。

「ん？　なんか今、神楽かぐらの叫び声が聞こえたような……」

駅前のコンビニのレジで会計を待っていた坂田銀時さかたぎんときはつぶやいた。まだそれほどの歳ではないのに、天然パーマの髪は完全に銀髪。肌の色は一般的な黄色人種のものでアルビノというわけでもないだろう。だらしなく着た純白の着物が、やっぱり普通の住宅街で着るには目をひいてしまう。もちろん、こんな人間が現実リアルの住人であるはずがなく、彼もまた『銀魂』世界の住人　というより主人公である。

「ん？　あつ、お前は……！」

前で会計していた男が振り向く。マヨネーズばかり何本も買っていたので嫌な予感がして故意に顔を見ないようにしていたが、

どつやら予感的中らしい。

彼の名は土方十四郎^{ひじかたとしじろう}。真撰組鬼の副長であると同時に、希代のマヨラーだ。そして銀時とは何かにつけて張り合うことが多いりする。

「あー、全く、嫌な奴に会っちゃったぜ」

「こっちのセリフだ。主人公なのになかなか出ねえからてつきり行方不明設定とかで後半まで出ねえかと思っただのによ」

「気にすんな。作者の技量の問題だ。ところでお前、何わざわざコンビニでマヨネーズ買ってんの？ スーパーとかのほうが安くない？ ソレ」

「うるせーな。トオルの家からこっちの方が近かったんだよ。お前こそ、わざわざ何買いに来てんだよ」

「見りゃわかるだろ。ジャンプだよジャンプ。お前の目は節穴か？」

「そう言うことが訊きたかったんじゃないよ。何でわざわざジャンプをこっちに買いに来てんだよ！ そんなもん向こつの世界でも売ってんだろ」

「バーカ。向こつの世界のジャンプじゃ『銀魂』載ってねえだろうが」

と、まあこんな感じに。

銀時がジャンプ会計をしていると、ある二人組がコンビニに入っ

てきた。

「駅につきあわせた拳句今度はコンビニかよ。＞青い秘術書くの調査する気あるのか？」

「俺にとって鉄道はすべてに優先するんだぜ！」

「ちょっと前に誰かから聞いたようなセリフだな……」

「まあ、いいからいいから。取り扱ってる店が少なくなってるさー。なかなか手に入らないんだぜ？」 『週刊鉄道マニア』」

黒髪碧眼と金髪藍白眼の似ていない兄弟、ピーターとエドモンドである。

（おーおー、こりやまた随分とコアなものを買う客だなあ）

そんな軽い調子で小銭を店員に渡しながらピーター達の方を向いた銀時は、ピーターが背中に背負った長剣に気づいた。

一方、ピーターも銀時が腰に差している木刀と、土方の腰の刀に目をとめる。

『お前、コンビニになんてモン持ち込んでんだ？』

第八節 主人公はつらいよ（後書き）

っということぞ、ようやっと銀さんの登場です。

遅くてすみません。

そして、ついに出会わせてしまいました。瞳孔開いてる「ンビ」。

（エドと土方）

やっぱり主役級が四人も出てくると華やかでいいですねー！。

第九節、デジモンはマジでネ申（前書き）

今回デジモンパロディ発生注意

第九節くデジモンはマジでネ申

「マタ。そつちの見回りは終わった？」

「はい」

都市近郊の住宅街において、まだ自然を残している春日部山かすかへの奥地。とはいえ、少し前の土砂崩れで逃げ出してしまったまま、まだ戻っていないのだろうか、ほとんど動物の姿は見えない。ただ、山の外から飛んできた蝉の鳴き声だけが響いている。

その春日部山にたたずむ、二つの人影があつた。一人はまだ幼稚園児ぐらいの少女だが、濃い化粧のために大人びて見える。もう一人は中学生ぐらい。中性的な顔立ちのために、性別は判断できないが、生命力あふれる新芽のような緑髪が印象的だ。

ボーン・クイーンとマタ・タミ。春日部の裏に存在する世界、ドン・クラリーの住人である。

「ほんと、人攫いなんて、こつちの世界も物騒になったものよね」

「今回はドン・クラリーが絡んでないといいんですけど」

「そうね。まだトオルもしんのすけも無事だから多分関係ないと思うけど、油断はできないわ」

その時、茂みが音をたてた。

「……誰かいるみたい！」

「この時間帯にこんな山奥に……怪しいですね」

その茂みの反対側を歩く、二つの人影があつた。

「えっと、この辺でよかつたかな……」

「確か、この山の頂上あたりでしたよね」

「僕は正直、合成としか思えない映像に驚いていてよく見てませんでしたけど」

「もう、主人ましめたは情けないでしゅなしゃ」

人影は二つなのに四人の声が聞こえるが、それもそのはず。この

二人組は拓人たくととユースチス。残りの二つの声の主、ファルチエとライムIMEはそれぞれ杖、腕輪の形態で彼らに装備されている。

「例の超能力事件になにか関係があるかもしれないと思って勢いで山に登つてきちゃいましたが、こんな山の中に秘術書なんかあるんでしょうか？」

ユースチスが尋ねる。いわゆる「もやしっ子」体型から予測されるとおり、あまり体力はないらしく、そろそろ疲れが見え始めていた。

「逆に貴重なものだからこそ、誰も予想しないところに隠すかもしれませんよ」

「待ちなさい」

呼び止める声を聞き、二人は上を見上げた。確かに声は頭上から聞こえたのだ。LIMEのときほどの驚きはない。周りにはこれだけ木が生えているのだから、木に登っていれば上から声がするのは当然だ。その声の主は、予想通り木の枝に腰掛けていた。しかし、驚いたことに……

「子供？」

その木の上にはいたのは、中学生ぐらいと、幼稚園生ぐらいの子供だったのだ。

中学生ぐらいのほうの子供と協力したにしても、この木に幼稚園生ぐらいの子供が昇るのは難しいだろう。それに、次の瞬間、二人は空中で一回転して拓人たちの前に降り立ったのだ。普通の子供にそれほどの運動神経があるはずがない。

「あなたたちね。噂の人攫いは！」

二人のうちの一人　ボーン・クイーンが言い放った。

「人攫い！？　ちよつと、何かの間違いじゃ……」

「うるさいわね！　こっちはカルシウム不足でイライラしてんのよ！　認めないんだつたら、こっちから行くわよ！」

ボーン・クイーンはユースチスに飛びかかり、長い付け爪で切りかかる。トオルのピンチに備えて、刀としても使える鉄の付け爪を用意していたのだ。もちろん初歩的なヘンジルで爪をのばしてもよいのだが、それほどヘンジルが得意ではないクイーンには、こっちの方が早かった。

ユースチスはとっさに腕で心臓をかばったが、鋭い爪跡が残る。

「主人！ こいつ、人間の戦闘力しえんとつりやうで勝てる相手じゃありません！
腕輪形態のLIMEが言う。

「……やるしかないのか？ 正直この能力、あまり気に言っていないだけだね」

「> 魔弾カスバルく！」

苦戦するユースチスを見て、拓人が援護射撃を放った。しかし、盾に姿を変えたマタが攻撃をはじめ返す。彼女が持つアホーウと呼ばれる能力の一つ、ヘンジルである。彼女は自分の姿を好きなものに変えることができるのだ。

「突然攻撃したクイーンもどうかと思うけど……邪魔はさせない！
マタは巨大鉢ホーネットになり、拓人に突撃した。

「主人、迷ってる時間はありません！ 能力の発動をお願いします
しゅ」

「わかった。で、どうすればいい？」

マタと拓人の戦闘を横目で見ながら、ユースチスとLIMEが相談する。

「能力の発動自体はLIMEが全面的に補助しやてしましゅ。主人は精神統一しえいしんしてください」

「精神統一……？ くっ！」

クイーンの攻撃をかわしきれず、ユースチスの腕に新たな傷が走る。

「何でもいいしゅ。変身ポーズとか呪文詠唱とか」

「……変身ポーズをとってる余裕はないな。詠唱いくよ。何でもいんだよね？」

ユースチスは詠唱を始めた。

「たまたまきょうしつにやうし偶因狂疾……」

ぎゅいーんぎゅんぎゅんぎゅーん！

「……何、今の音」

詠唱を中断して尋ねる。

「何を言っているのですゆか、でんしえつ伝説のネ申挿入歌、せうしやうにゆうかBrave heartでしゆ！ 進化の時はこのBGMがお約束でしゆ！」

LIMEが製作者（シユタイン教授）の影響がはつきり表れている発言をする。

「ああ、Brave heartだったんだ。擬音語がくだらなすぎて解らなかつたよ。っていうか、進化って言うな」

一通りツツコンでからユースチスは詠唱を再開した。再び適当な擬音語で申し訳ないほどのネ申挿入歌が流れ始める。

ぎゅいーんぎゅんぎゅんぎゅーん！

ちゃーちゃっちゃーちゃらら〜 ちゃんちゃんちゃんちゃんちゃん、
ん、ちゃらら〜

ちゃんちゃんちゃんちゃん、ちゃらら〜 ちゃららら

「ただまたまきょうしつにやうしつていもゝことなめ偶因狂疾成殊類
さいかんあいやつてのかるへからず災患相仍不可逃
ことなむはひつがたれかあへてきせんや今日爪牙誰敢敵
けつしほせいせきとまにあひたかりき当时声跡共相高

「たがひはひつがたれかあへてきせんや我為異物蓬茅下（われはいぶつとなりてほうぼうのもとにあれ
どむ））」

「きみはずてにえふにのじりてきせいにいひつら君已乗&#366602：氣勢豪
このゆめへけいさんめいげつにたいし此夕溪山对明月

「なまはな不成長嘯但成&#22071：（ちよつせつをなせず

してただかうをなすのみ)」

LIMEが放つまばゆい光がユースチスを包む。驚いたボーン・クイーンが距離をとる。光は次第に大きくなり、空中に飛び上がる。光がおさまると、そこにいたのは。

深緑の鱗におおわれた皮膚。たくましい体躯からとびだしたしなやかな尾。背中にはびろろうごのような翼。

「まさか……！」

その瞳の奥で燃える真紅の炎。

「ドラゴン!?」

再び襲い来るボーン・クイーンを空中に飛び上がってかわし、尻尾ではねつける。

「ちょ、どうなってんのよ!? そっちに力を受けし者が居るなんて……！」
テイリ・アホーウ

「まさか、またキルがらみなんじゃ」

「そうね、考えたくないけど」

ボーン・クイーンとマタが互いに目くばせした。

「だとしたら、手加減は無用ってわけね！」

「まさか……あいつ……」

全員戦闘に夢中で気づいていないが、木の陰にかくれて彼らの様子を見ている人影が一つ。

「こんなところで会えるなんて ファアフィル！」

影は背中 of 剣に手をかけた。

第九節〈デジモンはマジでネ申（後書き）

ユースチスの超能力は、まあ、読めてましたよね。
詠唱内容が自虐的なのは気にしないでください。

ゆすちーはMですから。

第十節 参考書買いに行くとなぜか漫画を買ってしまう

「うーん、無いな！」

榮太郎はその内容にはふさわしくない明るい声で言った。それもえいたろうその筈、彼の手にかかった紙袋は、ライトノベルやマンガでいっぱいになっているのだ。

「最初からさがす気がないのでは？」

エーネウスがそんな榮太郎に向かって辛辣な言葉を述べる。

「いや、一応探してるって。ただ、本がある場所っていったらやっぱり本屋だろうと思って調べに入ったついでにだな」

そんな榮太郎の言い訳も長くは続かなかつた。なぜなら。

ドーン！

突然道の向こうから爆音とともに三人の女性が走ってきたからだった。

「あっ！ 居たわ！」

「助かった！」

うち二人はミヤビとシンクラヴィアのコンビ。

「わちやあああっ！」

「おっ！」

そしてその二人を傘で砲撃しているもう一人　神楽かぐらに榮太郎が目をとめる。

「素敵な釘宮ボイスが聞こえると思ったら、『銀魂』の神楽じゃないか！ コスプレか？ それにしてはよく出来て　いや、完成度高けーなオイ！」

榮太郎にじろじろ見られ、さすがの神楽も面喰らって足を止める。

「もしかシテ、知り合イ？」

「あたしこんな変なオッサン知らないアル」

シンクラヴィアと神楽が受け答える。

「ん？ 声は釘宮ボイスそのものなのに、口パクが全くずれていない……ってことはテープじゃないってことか？」

と、そこに一足遅れて白い巨大な犬、定春さだはるが到着した。

「おー、定春まで居るじゃないか！　いったい中に何人入って」

がぶっ。定春は榮太郎の頭に噛みついた。佐久間さくま榮太郎、本日二回目の流血。

「ん、この感触は本物　。まさかとは思うが、もしかして、君も本物の神楽ちゃんか？」

「何を言っているアルか。あたしはあたし。本物の神楽ネ」

神楽の方にも特別隠すつもりもなかったので、榮太郎が軽い調子で連呼する質問にスラスラと答えてくれた。

神楽たち『銀魂』の登場人物は、ある事件に巻き込まれて魔^ま虞^ぐ蛇^だ博士の二次元転送装置で漫画の中の世界（向こうから見たらこつちが「クレヨンしんちゃん」という漫画の中の世界らしいが）からこちらに来てしまい、それ以来たびたびこちらで何か事件が起きるたび訪れているらしい。今回こちらに来たのは、アニメを通してこちらに人攫いが出没するという噂を耳にしたからで、ミヤビとシンクラヴィアに攻撃したのは、その人攫いと勘違いしたからだそうだ。

「なるほどな。最近は科学の方も裏ではずいぶん発展しているらしいな」

榮太郎ですら魔法を用いて二次元の人間を実体化させたり、自らが二次元の世界に入ったりすることには成功していない。

「こつちの世界の科学ではまだ無理じゃないかしら。魔^ま虞^ぐ蛇^だ博士ってそつちの世界の人なんでしょ？」

と、ミヤビの冷静な分析。

「しかし、だとすると困ったことになったな」

ふと榮太郎が考え込む。

「銀魂のメンツは人攫い、こっちのメンツは六副官級の魔に対してそれぞれ警戒している。しかも、お互いに一部は武器を携帯していると」と 他の連中もどこかで戦ってるかもしれないな。探しに行った方がいいか？」

第十節 参考書買いに行くとなぜか漫画を買ってしまう(後書き)

とりあえず、榮太郎を思いっきりかけて満足です。

釘宮病判定って神楽でも出るんでしょかね？

ルイズやナギの動画で「くぎゅっっっっっ」「っってコメントはよく見ますが、

神楽だと見かけませんし。

銀魂ファンの民度が高いのか、神楽の民度が低いのか。

第二章 敵襲 ー 第一節 電話って結構変なタイミングでかかってくる (前書き

やっと風間君が書けました。
お待たせしてすみません

第二章 敵襲 ー 第一節 電話って結構変なタイミングでかかってくる

「もしもし、風間かまですが」

風間トオルは受話器をとった。まだ五歳であるにもかかわらず、しっかりとした対応。電話の向こうにいる相手が知り合いでなかったら、小学校の高学年ぐらいと勘違いしたかもしれない。しかし、相手は残念ながらトオルの知り合いだった。

「もしもし、風間くん？ オラ、しんのすけ」

受話器の向こうで聞きなれた声がする。しんのすけとは同じ幼稚園に通っているのだ。

「なんだ、しんのすけか。どうしたんだ？」

「あれ？ オラ、どうしたんだっけ？」

トオルはがくつとうなだれる。その反応をしたのはトオルだけではないらしく、受話器の奥でドサツと音がした。おそらく、みさえかひろしがコケたのだろう。

「銀さん達がどこにいるか聞くんでしょうが！」

どうやらみさえだったらしい。そんな声が電話に入っている。

「お、そうだったそうだった」

「銀さんならさっきまでうちにいたよ。もう帰っちゃったけど

いや、コンビニに寄って行ってたから、まだいるかな？」

「おお、そっか。じゃ、いまからそっちにいくから」

「駅前に最近新しいコンビニができたからそっちに行ってるかもしれないよ。そっちの方がうちから近いし」

「あたらしいコンビニ？」

「まだできたばかりだからしんのすけはもしかして行ったことないかな？ 僕も英語塾に行く時に前を通るだけでまだ入ったことはないし。一回うちまできてくれれば、そこから案内するよ」

二人はその後も数分間世間話を続けた後、電話を切った。

まさかこの電話が彼らを大事件に巻き込む原因になるとも知らずに。

鈴穂、鈴果、スーザン、近藤、沖田の戦いは熾烈を極めていた。

三対二で一見鈴穂たちが有利に見えるが、街中で振り回すからには>ワルプルギス<や>アイギス<もエネルギーを制御するしかないので、武器の威力が剣と弓対刀とバズーカになってしまい、形勢としてはやや押されていた。

しかし、刃物である機剣や刀、矢筒の術式により無限に補給可能

なスーザンの矢と違い、バズーカは残弾に限りがある。この状態で弾が尽きたら危ない。

「もしもし、聞こえる？」

建物と建物の隙間からその戦いを眺めていた緑衣の女性が、無線機のようなもので誰かに連絡を取る。

「なんだか厄介そうな連中が紛れ込んだみたいね。大丈夫？」

ややラ行の発音に難があるらしい。

「ああ、こつちでもやっている。片方は>学長アスランくのところの関係者か。もう一方はラケシスが言っていた>銀魂く世界の。まあいい、こちらの目的に差しさわりがなければ、むしろお互いにつぶしあってくれたほうが手間が省けるといふもの」

無線の相手は無機質にそう答える。

「そうね、こつちは両方ともそろそろ限界みたいだし……早く共倒れになってくれないかしら」

第二節くバカとハサミは使いよう(前書き)

今回、銀時・土方とピーター・エドモンドが正面衝突します！
イケメンが多いと作者もテンションが上がります！

第二節 くバカとハサミは使いよう

コンビニの前の通りで、エドモンド、ピーターと銀時、土方はにらみ合っていた。

誰からとなく、ピーターは剣、土方は刀を抜き、銀時は木刀を構える。

「ん？　なんだ、そっちの金髪は丸腰か？」

土方がエドモンドを見て言う。セーターの上に羽織ったロングコートの下に何か隠し持っているのだと思っていたが、まったくそれを取り出す気配がないのだ。

「るせー」

エドモンドは軽く舌打ちをする。

「手加減無用ってわけか、それならこっちから行くぜ！」

「足引つ張んじゃねーぞ！」

銀時と土方が先に動いた。それぞれ銀時はエドモンドに、土方はピーターに飛びかかる。しかし、彼らの視界からエドモンドとピーターは消えていた。

次の瞬間。土方の懐にエドモンドが飛び込んだ。

「なんだと……？」

読みを外した！

それなりに対等に渡り合える剣と刀、木刀と素手の組み合わせになるよう、相手側もピーターは土方、エドモンドは銀時に踏み込んでくると思い、正面衝突に備えたが、彼らはその裏をかいたのだ。

「っ、おいおいマジかよ」

銀時はピーターの長剣を木刀で受け止める。

「お前、正気か？ 素手で刀に向かってくるなんて」

「るせつ、武器が無^ねえからって足手まといなんてマツピラ御免なんだよ！」

刀の腹を拳で薙ぎ払い、巧みに刃を受け流す。荒削りな、武術とすら呼べない戦い方。だが、間違いなく強い。

「ってか、本当に大丈夫か、お前。瞳孔開いてっぞ」

「こっちのセリフだ」

両者いったん距離を取る。

一方、剣と木刀を交えたまま、銀時とピーターは睨み合っていた。

「木刀で長剣を受け止めただっ！？」

「こちとら真剣とやりあうなんて日常茶飯事なんでね。にしても、

こつちの世界って確か銃刀法とかあったんじゃないか？ 『銀魂』世界の刀にしてはデザインが妙だし 何？ R P Gの主人公かなんかのコスプレか？ お前はトマトか？」

「俺はポテトだ！」

「何でそんな急にネタ振られて的確に応えられんだよ！」

「やっちゃったぜ！」

銀時とピーターの剣が再びぶつかりあった。

と、木刀の勢いに押されて、ピーターの長剣が手から抜けた。

「しまった！」

もともと小学生時代から使っている剣だ。攻撃時の威力は術式で
ある程度強められてはいるが実際の質量は木刀と大差ない。使い勝
手はいいものの、逆にそれは一度手から抜けてしまったらあらぬと
ころに飛んで行ってしまふ可能性があるということだ。

案の定、剣は高く弾き飛ばされ。

続く木刀の攻撃に対し受け身を取りながら、ピーターは気づいた。
ここは魔法文明下のナルニアや>学園くではないのだ。路上で高く
弾き飛ばされた剣の先にある物は当然、電線！

バシッ！ 一瞬、刃で電流がショートし火花が散る。電線は大き
な弧を描き、その先には。

「子供!？」

そう、電線が向かった先に、ちょうど一人の子供が通りかかって
いたのだ。

「危ない！」

第二節くバカとハサミは使いよう（後書き）

はい、つまり土方もエドモンドも瞳孔が開いちゃってるといふことが言いたかっただけです（ええ

エドモンドの瞳孔が開いているのは児童文学なので遠回しな表現が使われていましたが、公式設定ですよね？

第三節、電線が切れてたら電力会社、電話線が切れてたら電話会社に連絡（前書

今回、風間君たちと銀さんたちが合流します。

第三節　電線が切れてたら電力会社、電話線が切れてたら電話会社に連絡

「風間^{かみま}くん、まだ？」

しんのすけは前を行くトオルに尋ねた。

「もうすぐだよ。まだそんなに歩いてないだろ」

確かにトオルの家からここまではそれほど距離ではない。だが、直前までマサオとくたくたになるほど遊んでいたしんのすけには多少酷な距離だった。

「もお、風間くんってばてびきしいぞ！」

「それを言うなら手厳しいだろ！」

「危ない！」

突然男の声が聞こえた。何かと二人が前を見ると、鞭のようにしなった電線がまさに自分たちを直撃しようとしていた。避けきれない！？

「くそッ！」

誰かが自分たちに向かって走ってくる。金色の長髪をなびかせた、スモーキーブルーの瞳の青年。自分たちを助けようとしているようだが、このままでは彼も巻き込んでしまう！

エドモンドは思わず固くつむった目をゆっくり開いた。目の前から迫ってきたはずの電線の先端がいつまでも自分に届かない。

「あっ……!？」

エドモンドは驚きの声を上げた。目の前に虹色の壁が現れて、電線受け止めていたのだ。

「これ……もしかして……」

その壁は規模こそ小さいものの、まぎれもなく>学園<のモニターで見た映像と同じものだった。

「おい、しんのすけ、トオル！ 大丈夫か？」

銀時がしんのすけとトオルのもとに駆け寄ってくる。トオルの能力>キルク<をめぐる騒動以来、二人を含む仲良しグループ「カスカベ防衛隊」と銀時たち「銀魂」の登場人物は友人同士なのだ。

「はい、僕たちは何とも。それより、あの、大丈夫ですか？」

トオルはエドモンドに声をかける。

「お、おうよ」

「まったく、びっくりしてしりもちついたから、オラのおしりがふたつにわれちゃったゾ」

「それは元からだろ！」

しんのすけとトオルの下らないボケツッコミが挟まったことはひとまず置いておいて。

「どうやら誤解してたみてえだな。悪人にやあの状況でしんのすけとトオルを助けに入るなんてマネ出来ねえよ」

銀時が腰のベルトに木刀をおさめる。

「そつちも、こんなチビっ子と前から知り合いなら、俺らが探しているヤツらとは別物みたいだな」

ピーターも背中中の鞘に長剣を戻す。

「どうやら、お互いに探してた気に食わねえヤローと相手を勘違いしてたみてえだな」

刀をしまった土方がピーターとエドモンドに目配せをする。

「しっかし、今までいろんな奴らを相手にしてきたが、剣持ってる仲間が居んのに素手で真正面から向かってきたヤツはお前が初めてだぜ。名を訊いておこうか。俺は土方十四郎」

「俺は坂田銀時。人呼んで万事屋銀ちゃんだ」

「ピーター・ペベンシーだ。ここで会ったのも何かの縁だ、よろしくな」

「俺はエドモンド。エドモンド・ペベンシー。エドって呼んでくれ」

「『エド』か、いい名前だ」

一瞬の間の後、銀時がエドマンズの肩を叩いた。

「えっ？」

面喰らった顔をするエドマンズに、銀時は付け加える。

「何の縁が知らねえけどな。俺たちが来た町の名前も『江戸^{エド}』って
言っただよ」

第三節、電線が切れてたら電力会社、電話線が切れてたら電話会社に連絡（後書

エド君の名前はもう、運命ですね！。

次回はラスボスボイス（爆）のアイツが登場！

第四節 この世に悪があるとすればそれは人の心だ（前書き）

ダオスファンの皆さん、こんなサブタイトルで奴を初登場させてすみません。

第四節 この世に悪があるとすればそれは人の心だ

(うまくつづし合わせることは失敗したか……)

物陰から銀時たちの戦いを見ていた者は舌打ちした。

(まあいい。多少厄介だが、こいつら程度ならこちらの戦力でも対応できないことはないし、何よりこちらもあるエドマンドとかいう男に死なれては困る)

「ところで、お前らこんなところで何やってんだ？」

銀時がしんのすけに尋ねる。

「おお、そうだった。さっきこんな本見つけたんだゾ！」

しんのすけが脇に抱えていた青い本を銀時に見せる。

「見たことがない文字で書かれているから、もしかしたら『銀魂』世界のものかと思っただんですけど」

トオルも付け加える。

「さあな。天人の文字は俺にもよくわかんねーからなんとも……」

「あああああつ!?!?」

銀時のセリフを遮り、ピーターとエドモンドが大声をあげる。

「ど、どうしたんだよ」

「それ、もしかして、あ、青い秘術書く！？」

(まずいつ！ まさかあの青い秘術書くが発見されるなんて！
かくなる上は……)

突然、道路の脇から炎が燃え上がる。

「うおっと、何だ何だ？」

その場所の一番近くにいた銀時が飛び退く。

「フッフッフ……」

炎の出所から不敵な笑い声が響く。

「あー、着物の裾、ちょっと焦げちまったよ。気に入ってんのに」

「オメーは何着も同じの持ってんだからいいだろ！」

「あの一、もしもし？」

完全にスルーされた笑い声はそっと呼びかける。しかし、銀時と

土方が口喧嘩を中断する気配はない。

「うるせーよ、お前だって似たようなモンだろうが」

「一応俺のは幕府から支給されてんだよ！ 税金かかってんだ！」

「無視するなっ！」

建物の隙間から、しんのすけと同じぐらいの大きさの者が姿を現した。

「あっ、お前は　！」

銀時、しんのすけ、土方がそちらを向き、叫んだ。ピンク色の小柄な体躯、左右で大きさの違う目、そして大きなつぶれた鼻。

「ぶりぶりざえもん！」

そのものの姿は、まぎれもなく、しんのすけが好きな豚のキャラクター、ぶりぶりざえもんだったのだ。

第四節 この世に悪があるとすればそれは人の心だ（後書き）

さて、今回からいよいよ敵との戦いが始まります。
前置き長くてすみません。

第五節 弱そうに見えるやつほど実は強い

「私はぶりぶりざえもんではない！」

「嘘つけ。どつからどつ見てもぶりぶりざえもんだろつが」

ぶりぶりざえもんの発言を銀時が一蹴する。

「創世記戦争で負けた責任をとらされて今はこんなブタに身をやつしているが、もとはと言えば私は炎の精霊の長　火界王パイモンだ！」

ぶりぶりざえもんは指先に炎をともして自らの正体を主張し凄む。しかし。

「で、そのぶりぶりパイモンがオラになんの用事？」

「混ぜるなっ！」

しんのすけには利かなかった。

「その>青い秘術書<をこちらに渡してもらおうか」

気を取り直してぶりぶりざえもん　もとい、パイモンが要求を伝える。

「　ってことはやっぱりこれが本物の>青い秘術書<だったことか」

「おいおい、いまいち話がわかんねーが、なんだかやばそうだな」
土方が再び刀を抜く。

「真つ当な理由がありゃ、不意打ちなんかしかける必要ねえだろうしな」

銀時も木刀を持ち身構える。

「ふむ、面白い。では早速」

「お待ちください、パイモン様」

背後から唐突に別の声と言う。抑揚のない声だが、感情のない合
成音声とも違う。攻撃性と冷静さを備えた鋭い声。しかし、声
が聞こえるまで、だれもその声の主の気配を感じなかったのだ。

「ここは私にお任せください。パイモン様は他の面々にご指示を」

真つ先に振り向いたのはエドモンドだった。

声の主は、縦にくるくるとロールした黄金の髪と同じ色の切れ長の
目をした、中世の騎士のような姿の男。額から延びた長い角が彼
が人間ではないことを象徴している。

「申し遅れました。私、麒麟きりんの化身、スナミと申します」

第五節、弱そうに見えるやつほど実は強い（後書き）

えっ、創世記戦争の責任を取らされたならジエイデイスたんはって？
逃げたんじゃね？（てけとー）

第六節 電車の中では携帯をマナーモードにしよう

「くっ……！」

沖田は舌打ちした。そろそろバズーカの残弾が少ない。最初は相手も弓矢で消耗戦と思っていたが、どんな仕掛けがしてあるのか、見たところ相手の矢は無尽蔵。だとしたら、確実にこちらが不利！

そんな動揺を読み取ってか、近藤が沖田に話しかける。

「どうする。一回退いてトシと合流するか」

「癪ですがねイ」

「そうは言っても、ここでやられるわけにもいかんだろう」

沈黙の中、鈴穂、鈴果と近藤の上がった呼吸だけが響いた。

ぶーん、ぶーん、ぶーん。

突然、誰かの携帯電話のバイブ音が鳴り響いた。

静まり返った空気に、その音だけが響く。

「もしもし、何よ。今いいところなんだけど、聞こえちゃったかも

しれないじゃない」

電話をとったのは、その場にいた誰の声とも違う、大人っぽい女性の声だ。(近藤と沖田は鈴穂の声を知らないのだが、彼女の両手は>アイギス<とホワイトボードででふさがっている)

「えっ!? >青い秘書書<が>学園<側にわたったですって!?
まあ、いいわ。要は>学園<側の人数を減らせばいいんでしょ?」

「そこに誰がいるのか?」

近藤が声が出たほう、ちょっとした建物と建物の隙間に歩み寄る。

「ほら、やっぱり聞こえちゃったじゃない。ま、さっきまでとは状況がかわったからいいんだけどね!」

そこから、一人の女性が姿を現した。流麗な金髪。丈の長い緑のドレス。思わずその場の状況を忘れてしまいそうになるぐらい、美しい女性。

「何者だ?」

近藤が刀を向け、静かに問いかける。

「あなたたちに用はないの。どいててくれるかしら」

近藤の刀にも鋭い視線にも動じず、女性がスーザン、鈴穂、鈴果に歩み寄る。

「>学園<の関係者よね。

悪いけど、ここで消えてもらうわ」

緑衣の女性は手を空中にかざした。何かしらの魔法による攻撃が来ると気付き、スーザン、鈴穂、鈴果は身構えるが、魔法戦に慣れていない近藤と沖田は対応をとれない。

『避けてっ!』

と、鈴穂が書き示したホワイトボードの方を近藤と沖田が見る余裕があるはずもなく。

緑衣の女性の手から放たれた毒液は すんでのところで矢にはじかれた。

「なんですって!?!」

「『悪いけど、ここで消えてもらっわ』って言われて、素直に消えるわけ、ないでしょ?」

スーザンが微笑みながら言ったが、目が笑っていないかった。

その時。

「くっ!」

突然沖田が崩れ落ちる。

「どっした、総悟!」

「い、いけねえ。さっきの毒液がかすっちゃった」

「わかった。ここは俺が引き受ける。お前はトシなり万事屋なり、応援を呼んで来い！」

「チッ、しょうがねエ」

沖田が一步退く。

「鈴穂さんも応援を呼びに行つて！ さすがに生身の人間だけじゃ、毒相手にいつまで持つかわからないわ」

鈴穂は頷くと、ペンダントに触れ、自分の中に鈴果を戻す。

「あなたの相手は、私が引き受けます」

スーザンは緑衣の女性に向けて、矢を番えた。

第六節、電車の中では携帯をマナーモードにしよう(後書き)

書いた後で気づいたけどさ、

スーザンも別に魔法戦慣れはしてないよね。

ジェイデイスたん戦は後衛だったし、

それ以後魔法戦ってないし。

まあ、茶を濁します。

第七節、マニキュア付けたまま寝ると爪が紫になる(前書き)

今回はちょっと短めです

第七節 マニキュア付けたまま寝ると爪が紫になる

ひゅんっ。空気が裂ける音とともに、ユースチスにポーン・クイーンの付け爪がユースチスに当たる。しかし、目を浴びて煌めく深緑の鱗に傷をつけることはできない。逆にクイーンの付け爪が取れた。しかも、付け爪の下にあったリアル爪ごと。

「い、痛あああああつ!?!」

「超強力接着剤なんかでくっつけるからですよ」

大声でわめくクイーンに、マタが冷静に指摘した。

「だって、普通のネイルアート用の接着剤じゃ戦いの途中で取れちゃうじゃない!」

「はいはい」

クイーンに対応しつつも、ホーネット巨大蜂にヘンジたマタは攻撃の手、いや、攻撃の針を緩めない。しかし、>連盟<の件でピンチにもすっかり慣れてしまったからだろうか。拓人には頭の一割ほどを使って、余計な事を考える余裕があった。

(なるほど、アレがユースチスさんの超能力か。……確かにシユタイン教授なら研究に飛びつきそうだな)

>全人類総ケモノミニミ化計画<の一環として、変身能力の研究はおそらく重要だろう。ちなみに、ユースチスの龍としての姿には、なぜか中型犬を連想させるロッププレイヤーがついているが、最初から

ついていたのかシユタイン教授が勝手につけたのか確かめる手立ては拓人にはなかった。

「でも、私の武器はこれだけじゃないわ！」

クイーンは言ったが、マタはハツタリだろうと思った。もともとクイーンの得意分野はどちらかと言うと補助系^{サポート}。ボーン・バンパイアを束ねるものとして同族相手に効果的な能力はいくつか持っているが、どれもドラゴン相手に有効とは思えない。

「くらえっ！ この間『銀魂』世界からくすねてきた再利用爆弾！」

「えええっ！？」

クイーンがいつの間になんなものを手に入れていたのかはさておき、これは利いたみたいだ。さすがに皮膚を傷つけるには至らなかったが、爆風の勢いでユースチスはたじろぐ。

その時、突然ユースチスの背に深い亀裂が走った。次の瞬間、その亀裂から真紅の鮮血が迸る。

「クイーン、今のは！？」

「わ、私じゃないわ！」

「じゃあ、いったい」

「うるさいなあ、まったく」

クイーンとマタのやり取りに割り込むように、少年のような声が

割り込んだ。

「悪いけどね、こいつは僕の獲物なんだ、邪魔しないで」

草むらの影から、声の主が姿を現した。幼い声色の割に背丈はマタと同じぐらいある。顔は包帯でおおわれているが、青い瞳と白い肌、身につけた民族衣装が北欧の民を思わせる。

「ファフニル、アーネスト・シグルズの名において、決闘を申し込む！」

第七節「マニキュア付けたまま寝ると爪が紫になる」(後書き)

「シングルズ」って知らない人が多いかなーと、

プロットの段階では思ってたのですが、

テイルズオブバーサスの影響ですっかり有名に。

今後の展開がバレバレになってしまいそうですが、

銀魂公式との兼ね合いで(?)外せないなのでこのまま行きます。

第八節 街中で芸能人にあっても結構気付かない（前書き）

戦闘編はひとまず一回お休みして、
女の子たちのほのぼの風景でもどうぞ。

第八節 街中で芸能人にあっても結構気付かない

「パスである！」

「きゃはは、お姉さんのパス強すぎー」

ルーシィとタナロットは公園で二人の少女と遊んでいた。

ボールが道路に飛び出して来たのを拾ってあげたところ、タナロットがいつの間にか遊びに参加してしまったのだ。

もちろん、創造魔神であるタナロットはまだもしかしたらこの子達より幼いかもしれない歳なので、責めるわけにもいかない。

（ それに ）

ルーシィは思った。

（ 『青い秘術書』 なんだから、 『青い鳥』 みたいに案外身近にあるかもしれないし ）

「そう言えば、名前はなんというのであるか？」

タナロットは二人の少女に尋ねた。

「私は酔乙女すめいめあいと申します」

二人の少女のうち、長い黒髪の少女が答える。

「わたしは桜田ネネ！」

茶色がかった髪の少女も答えた。

「ところでおねえさんたちは？　なんだかくろいかみのけのほうのおねえさん、どこかで見たことあるような気がするんだけど」

「えっ？」

ネネの発言にあいは首を傾げた。

「何を言ってますの？　お姉様がたは二人とも黒髪でいらっしやいますけど」

そのあたりの説明はルーシイもタナロットから聞いていた。タナロットは普通に町を歩いても目立たないように、単純な視覚操作魔法の一種をかけられている。つまり、魔法の存在を知らない者が見ると、耳はとがっていない普通のものに見えるし、髪の色も多少赤みがかった黒くらいにしか見えないはずだ。

しかしネネに魔法に関する知識があるようにも見えないし、何かの特殊体質だろうか。

「あっ、名前よね」

「我はタナロット・アンサーティンである」

「私はルーシイ・ペベンシー」

とにかく、ここであいなまで違和感を持たれては困る。タナロットとルーシィは慌てて名乗った。

が、ルーシィの名前を聞いた瞬間、二人の目が好奇心で見開かれた。

「ルーシィ・ペベンシー……って、ひょっとしてナルニア国の!？」

「そうだけど……なんで知ってるの？」

戸惑いの表情でルーシィが尋ねる。

「ナルニア国物語って本で読みました」

(そう言えば、キルケ博士の友達が、私達のことを本にしたっていう取材に来たコトがあったっけ。あの本売れてたんだ)

「でも、なんでルーシィさんがここに？」

「まくだ魔虞蛇博士の二次元転送装置でいらっしやったのでは？」

「まくだ魔虞蛇博士って……」

ルーシィが訊き返そうとしたその時。

「あつ、ネネちゃんにあいちゃん！　おーい」

公園の脇の道を通りかかった眼鏡の青年が、ネネとあいと話しかけた。>学園<ではこの時代に日本の一般社会で和服を着た者はほ

とんどいないと訊いていたが、完全に絶滅したわけではなかったの
だろうか、青年は和服を着ていた。

「あ、新八さん！」

「あれ、二人とも、お母さんとか黒磯さんは？」

新八と呼ばれた青年は二人に尋ねる。

「今日是一緒じゃないわ」

「黒磯は休暇中です」

「って、大丈夫なの？ 人攫いが出てるってテレビで見たけど」

「へーキよ 山崎さんがついてるもの」

ネネが答えると、砂場の脇にあった木の枝がバキバキ折れて、木
の上から黒の全身タイツを身にまとった青年が落下してきた。

「気づいてたの!？」

木の上から落ちてきた青年が尋ねる。

「ひとさらいがかくれてたらこわかったから、公園についてすぐに
ミルでしらべちゃった。おしごと中だったみたいだから、声はかけ
ないでおいたんだけど……」

ネネがちろつと舌を見せる。

「ところで、そっちの二人は？」

「えっ、山崎さん、知らないの？ 私たち、てっきり」

その時、山崎のこめかみに紙飛行機が命中した。

「いたたっ、なんだ？」

「待ってください、この紙飛行機、何か書いてありますよ」

新八が紙飛行機を広げる。そこには、紙いっぱい書かれた『大
変！』の文字があった。

第八節、街中で芸能人にあっても結構気付かない（後書き）

最近なぜか筆が進むので、このペースを逃さずに更新していきたいです。

第三章 集合 第一節 男と女が一緒にいるだけでカップルに見えるやつはそ

「参ったわね。どこにもいないわよ」

「じつちモヨ」

ミヤビとシンクラヴィアが榮太郎に報告した。

「うーん、ジルちゃんとカスピアンは捕まっただけだな。他の奴らがどこにいるか……拓人にも鈴穂ちゃんにも連絡つかないし」

「っていうか、別れて探したほうが良くない？」

ジルが榮太郎に提案する。

「いや、今こっちには人間語がしゃべれる『銀魂』側の関係者が神楽さんしかいないからね。もし>学園<側と『銀魂』側が争っているとところに出くわしたとして、『銀魂』側の人間がいなかったら状況の説明をむこうが信じてくれるとは限らないし」

カスピアンが提案を却下した。

「やっぱり拓人の事件の時にバウリング買っとけばよかったな」

「例えバウリングがあったとしても定春サイズに調整できないのでは？」

榮太郎とエーネウスのやり取りを聞いて、ジルは「拓人の事件」とやらの内容が気になったが、訊いてる場合ではなかった。

その時。ミヤビとエーニュースの耳がぴくんと動く。

「今、向こうのほうで何か聞こえなかった？」

「ええ、まるで、何か倒れたような……」

「行っテみまシヨウ」

「よし、行くアルヨ、定春！」

シンクラヴィアの提案で、神楽と定春が真っ先に動く。

「あんな見た感じ普通の女の子が神族や魔族より運動神経いって、
どんな設定の漫画なのよ、『銀魂』って」

「さア？」

「わんっ！ わんっ！」

神楽より先に『倒れた何か』に到達した定春が、大きな声で吠える。

「定春？ 何か見つけたアルか……？ ツ！？」

定春が見つけた『何か』を見た神楽の表情が一変した。

榮太郎とエーニュースが追い付く。と、榮太郎も神楽と同じく驚愕

の表情を浮かべた。

「沖田総悟……！」

榮太郎の目線の先には、腕を押えてうずくまり、小刻みに痙攣する茶髪の青年がいた。

「何このシチュエーション！ めっちゃおいしい沖神じゃねーか！ やっぱり人気のカップリングは違うなー、うん！」

がすつ。 >デスクイン<が榮太郎の頭部を直撃した。

第三章 集合 第一節 男と女が一緒にいるだけでカップルに見えるやつはそ

細かいところ違いますが、二人とも片言の日本語なので、
神楽とシンクラヴィアと一緒にいるとパツと見区別がつきません。

第二節 世の中ズルしないとやってけないこともある（前書き）

アレ……スナミってかっこいい人のはずだったんだけどなあ……？

第二節 世の中ズルしないとやってけないこともある

「さて、まずは手始めに」

スナミの指先に黒い魔力の球が生まれる。>魔弾^{カスバル}の類だろうが、それにしては異様なまでに禍々しい気配を持っている。

「行きますよ！」

スナミはそれを勢いよく射出した。土方は間一髪それを交わす。

「ひよえーっ！」

「お前、『ひよえーっ』じゃねーよ！俺がキヨン時やる前にお前が土方みくるやってどうすんの？」

「今のは無意識！」

「一部にしかわからないネタでボケてる場合じゃないでしょう！」

とかなんとか。

「フフ、そんな余裕をこいていられるのも今のうちですよ」

再び>魔弾<が射出される。今度はエドモンドがかわし損ねた。くるぶしのあたりに当たった攻撃は、そのままエドモンドの体内に吸収される。

「おいおい、爆発でもするのかと思っただら消えちまったぞ？ こけ

おどしか
「

「ぐ……ッ！」

銀時が言い終わると同時、エドモンドが倒れる。

「おいエド！」

ピーターがエドモンドを助け起こす。エドモンドの指が小刻みに震える。

「ッく、これぐらい、なんてことねエ……」

「毒系の魔法か？」

「毒ですって？」

スナミは鼻で笑った。

「どごその蛇女と一緒にしないでいただきたいですね。もっとも、ある意味正解かもしれません」

「隙あり！」

棒立ちするスナミの後頭部を銀時が木刀でぶっ叩いた。

「な……普通そこは『どついうことだ？』とか聞き返すでしょう！
突然背後から攻撃って 男として恥ずかしくありませんか」

「ごちゃごちゃうっせーよ。そんなに自分の必殺技の解説がしたけ

りや、訊き返されなくても自分で勝手にほざいてればいいだろうが」

「いや、あなた絶対解説してる間に攻撃してくるでしょ」

「攻撃されたくなかったら技の説明なんかしなくてもいいじゃねえか。馬鹿なのか？ 馬鹿なのかお前は！？」

「手の内を明かした上で正々堂々勝負してこそ紳士というもの」

「戦隊ヒーローかぶれのガキだよ」

土方がため息をついた。

「技の解説させてあげないと、話が先に進みそうにありませんよ」

トオルが言った。ちなみに、スナミなりの心配りなのか何なのか、子供であるしんのすけとトオルの二人は全く攻撃を受けていない。

「しゃーねーな。おい、聞いてやるよ。ありがたく思え」

「なんですかその上から目線は。……まあ、よろしい」

スナミは咳払いをし、再び解説を始めようとした。

「あつ、もうこの章終わりじゃん」

「ってちよつと待ってくださいよ、何でこんな半端なところで切りますか！」

「しょうがねーだろ、作者の執筆が亀なんだから更新速度の確保の

ためだ
」

第二節 世の中ズルしないとやってけないこともある（後書き）

すみません。ギヨン魂ネタは私の趣味です。

土方みくると朝ヅラ涼子は俺の嫁。

第三節 ペットボトルはリサイクル(前書き)

よその執筆が立て込んでました！
更新遅れて申し訳ありません

第三節 くペットボトルはリサイクル

「私の能力は相手の中にある『罪』の意識を増幅させること。人間という生き物は誰しも罪を背負って生きていますからね」

言つてスナミは不敵に笑う。

「章の冒頭から何解説で始めてんだよ」

「あなたが前回解説ぶつた切つたからでしょうが！」

銀時のボケにスナミは突っ込みを入れた。スルーすればいいのに無駄に律義な性格のようだ。正直面倒くさい。

「まあいいでしょう。すぐに黙らせて差上げますよ！」

新たな^{カスバル}魔弾^{カスバル}が放たれる。いろいろと会話の流れをぶつたぎられてイラついていたのだろう。さりげなく先ほどより大きい。そして球速もあげている。

が、>魔弾<は目の前に現れた虹色の壁によって弾かれる。

「何っ!？」

「待つてよ! 何が目的か知らないけど、いきなり攻撃を仕掛けてくるなんて卑怯じゃないか！」

トオルが非難距離から叫ぶ。スナミはしんのすけとトオルの方にはやはり攻撃を仕掛けてはいないが、流れ弾が飛んでこないとも限らないから、一応ある程度の距離はとっておいたのだ。

「卑怯などと人間ふぜいに言われたくはありませんね。私の目的はすべての罪深き者達の断罪。そのためにはたとえ私自身が悪になる
うと
」

例により銀時の不意打ちが決まった。

「ぐほっ！」

「なんだか爆笑問題がない人だぞ」

「それをいうなら学習能力だろ」

もつすでにしんのすけとトオルにまで呆れられている。

「な、なにはともあれ、その少年が居る限りあなたたちに攻撃を

仕掛けることはできないようですね……。まだ無垢な子供に手をあげるのは私の美学に反します。今日のところはひとまず引き上げるとしましょう」

言い終わった瞬間、スナミの姿は消えていた。

「……何だったんだ」

「あ、そうそう」

「おわっ!？」

息つく間もなく、スナミはすごいスピードで戻ってきた。

「一つ忠告しておきたいことがあります」

「敵なのに何でわざわざ戻ってきて忠告すんだよ」

「銀さん、ほつところ。コイツはきつところいうキャラなんだ」

毎回ツツコンでると話が進まなくなるのがやっとなわかってきた。ピーターが銀時を制する。

「私は先ほどの攻撃、本気を出していませんでした。効力はせいぜい相手の戦意を喪失させる程度。しかし、そちらの金髪の少年……まさか倒れる程とは」

エドマンズの顔がさつと青ざめる。

「私の忠告したい内容が解りましたね」

「いや、残念ながら僕は頭が悪くて」

ピーターがスナミを睨みつける。そのまなざしから、銀時と土方は何やら訳ありであることを悟った。

「っつーこつた。おせっかい御苦労さん」

「フフ、まあいいでしょう。では、私はここで」

今度こそ姿を消すスナミ。

「……マジで何だったんだよ」

「とにかく、奴の仲間がほかの所にも出没しているかもしれない。となるとカスカベ防衛隊の奴らが心配だ」

銀時がしんのすけとトオルに目くばせする。

「おお、オラ、さっきまでマサオくとあそんでたゾ! まだちかくにいるかもしれないゾ!」

「そうか、だったらこんなところまでじっとしている場合じゃねえな」

「僕たちも手伝います！」

銀時たちは駆け出した。

第三節〜ペットボトルはりサイクル（後書き）

ところで、シエアワールド元様にボカロが登場しましたね。

氷山キヨテルと新八微妙にデザインかぶってるけど、

これ以上新八のキャラが薄くなったらいたたまれませんね……。

でも氷山先生は出してほしいです！

ネネちゃんとかいちゃんが襲われる可能性とか知ったこっちゃありません（あ

第四節、爬虫類は何も悪い事しなくても女子に嫌われる(前書き)

今回はゆすちーの話です。

残りのメンツが見事に傍観者w

第四節 爬虫類は何も悪い事しなくても女子に嫌われる

アーネストの攻撃を避けるため、ユースチスは春日部山上空へと飛びあがる。本当ならあまり龍の姿で目立ちたくはないのだが、生命の危機においてそんなことを言っている場合ではない。

「逃がさないっ！」

アーネストが剣を上空に掲げると、その切っ先が光り輝き、アーネストの体が宙に浮き上がる。そして矢のようなスピードでユースチスの翼に突っ込む。

「ぐルう……っ！」

ユースチスは攻撃をかわすため上空で急旋回する。「そんなのアリかよ」とでも言いたげな目だ。

「クイーン、あれは？」

「わからないわ。アヤツル系統のアホーウ　だとしたら剣が光るのはおかしいわね」

どちらに加勢していいのか分からず、上空で行われる戦いを見守るしかできないマタとボーン・クイーン。

「でも、それ以上に気になるのがあっちの龍の能力　」

アーネストへの追撃が届かなくなり、同じく戦闘に参加でなくなった拓人は、そうクイーンがつぶやいたのを聞き逃さなかった。

「わが宿命の敵、ファフニル！　覚悟！」

相手が飛んで来れないと思ったから上空に逃れたものの、空中戦では小回りが利かないユースチスのほうが不利だ。背中に深々と剣をつきたてられ、ユースチスは苦悶の表情を浮かべ、たまらず尻尾でアーネストを払い落とす。空一面に血飛沫が舞った。

「ユースチスさんっ！」

「ぐラあッ！」

反撃しなければやられると判断したのか、アーネストに向き直り、火炎弾を連射する。

「なかなかやるねっ」

アーネストはすべての火炎弾を華麗に交わす。

効いていない！

「グ……っ」

その時、アーネストの懷中で携帯電話が鳴った。

「もしもし、今取り込み中 何？ 目立つなって？ もう、うるさいなあ。ハイハイ、わかったよ。ファフニルとは後で戦わせてくれるんだよね？」

アーネストはしばらく携帯電話で話した後。

「不本意だけど、ちよつと『上』からストツプがかかっちゃってさ。今度会ったときは絶対殺すから。じゃあね」

と言つて、剣を抱えて飛び去った。

「ぐぐユウっ？」

あまりに唐突だったので、ユースチスは一瞬後を追いかけるが、追ったところでかなう相手ではないことを見抜き、ゆっくりと着地した。と、同時にLIMEが光り輝き、ユースチスは元の少年の姿に戻る。

先ほどの戦闘による傷はかなり深かったように見えたが、元の間人の縮尺に戻つてみるとそれほどでもない。

「……何だつたんだ、あいつ」

ユースチスは肩で息をする。

「えっ、『宿命の敵』つて言つてたから僕はてっきりユースチスさんの知り合いかと」

「僕はあいつた暴力的な輩とは関わらないようにしています。それに、ファフニルなんて偽名、使ったことありませんけど」
クイツと眼鏡のブリッジを突き上げる。

「でも『上』というのが気になりますね。もしかしたら、組織とかで行動してるのかも」

ファルチェの発言に、ユースチスの背中に悪寒が走る。

「他のみんなが危ないかもしれない！ 合流するぞ」

「ちょっと待つて、まだ僕たちとの決着が」

「いいわ。一時休戦よ」

マタを止めたのは、意外なことに、ボーン・クイーンだった。

「クイーン……？」

「あなたには聞きたいことができたし。力づくで倒せる相手じゃないってこともわかったわ。どう？ 取引しない？ あなたの仲間を探すのを私たちが手伝う代わりに、あなたの仲間が全員無事だった場合、私の質問に答えてもらう」

「わかった」

相手の目的はわからないが、ユースチスには少なくとも聞かれて困ることはない こともないが、この展開で「あなたはSですか？ Mですか？」と質問されることはないだろう。

「とりあえず魔力が強い先輩やミヤビさん、シンクラヴィアさん、エーネウスさんが戦ってたら見つかりやすいだろうし、もし魔力侵奪能力を発動していたら魔力の真空地帯が発生するはずだから鈴果と鈴穂も見つかるかもしれない。ファルチエはその辺を中心にサーチをかけてくれないかな」

「了解しました」

第五節　忘れたころにやってくるのは「天才」じゃなくて「天災」

「いけないいけない。しんちゃんのうちにわすれものしちやっただよ

佐藤マサオは家に帰る道を引き返していた。マサオとしてしんのすけやトオルとともに事件には巻き込まれ慣れているはずだが、この時は油断していたのだろう。

「あら、僕、ちょうどいい所ところに来たわね」

突然、背後から何の抵抗もなく、緑衣の女性に抱きあげられてしまったのだから。

「うわっ、おねえさん、なにをするの！　はなしてよ！」

「フッフ……」

緑衣の女性は不気味に笑う。

そこに、スーザンと近藤が追いつくが、女性は二人に向き直り、不敵に笑った。

「この子に手を出してほしくなかったら、おとなしく>青い秘術書<の調査から身を引きなさい」

「おい、マサオじゃないか！」

「近藤さん、たすけて〜」

泣きわめくマサオを心配する近藤だったが、それを無視して、スーザンは新たな矢を番える。

「やめろ！ マサオに当たったらどうするんだ！」

「大丈夫よ。あなたもさっきの戦いで気づいたでしょ。この矢は必ず敵に当たる。敵に当たった矢は、他のものには当たらないわ」

スーザンは矢を放つ。

しかし。

矢は緑衣の女性から大きくそれ、近くの街路樹に刺さった。

「な………なんですって!?!」

「馬鹿な！」

矢は確かに緑衣の女性めがけて飛んで行った。たとえ追尾ホミシゲく術式が機能していなかったとしても、確実にあたっていたはずだ。

それに、矢はバリアーなどではじいたとしても不自然な動きを見せていた。まるで、自ら緑衣の女性を避けたかのような。

「残念だけど、あなたの矢で私を射ルことはできないわ」

「………どういふこと?」

「フフフ、さあてね」

ドコッ！ 突然、鈍い音がして緑衣の女性が前につんのめる。その拍子に、マサオを抱えていた手が離れる。

「な、何者なのよっ！」

「何者じゃない、桂だ」

「ボ。エリザベスとボクもいる……」

第五節 〱 忘れたころにやってくるのは「天才」じゃなくて「天災」 (後書き)

と、言うことで久しぶりに俺の嫁ヅラが出せましたよー
しかし相変わらず非常に動かさじづらいです。

なんでだろ。ヅラばかりに動かさじづらいのかな (え

第六節 ミステリアスなお姉さんっていいよね

「あー、援軍が来たみたいね」

「援軍？ 初対面の者と幕府の犬に加勢するつもりはないが、マサオを人質に取るような卑怯者には天誅あるのみだ」

桂は刀を抜く。と、いうことは、先程の攻撃はエリザベスのホワイトボードか。

「まあ、私はどちらでも構わないけど」

緑衣の女性は体勢を立て直す。が、その時。一匹の蛇が女性のもとに這い寄った。

「あー？」

女性は蛇がちよろちよろと舌を出し入れするのを見ていたが。

「なんですって？ あの子がちうらに向かっている？ ……しようがないわね。作戦変更よ。一回引き上げるわ」

と、言い、目の前に>シフト・ポータル<を開く。

「待って！ ……あなた、何者なのかしら？」

「それは、あなたが一番よく知っているはずよ？ スーザン」

「な、なんで私の名前を……」

次の瞬間、女性の姿は消えていた。

「逃げたか」

「何だったんだ。今は」

「おーい、桂さん、ちょっと待ってくださいよ」

そこに、リリアンが追い付く。

「ぼ……僕は、あまり、体力、ないん、です、から……」

と、肩で息をしている。文字通りの王子様育ちなのだから当然である。

「リリアンさん？ どうしてここが……」

「そこで、鈴穂さん達に会って」

リリアンが後ろを振り返る。ちょうど鈴穂と、それに合流したらしいネネ、あい、新八、山崎、タナロット、ルーシイが続々とやってきた。

「マサオ君、だいじょうぶ？」

「スー姉！ 何があったの！」

ネネがマサオに、ルーシイがスーザンにそれぞれ駆け寄る。

「局長、これはどういう……」

「俺にもイマイチ状況が飲み込めないんだが、わかる範囲でいえば、春日部には今、俺達のほかに少なくとも二つの勢力がやってきている。そこにいるお下げの女の子の勢力には敵がいるらしく、最初は誤解して戦闘になったが、とりあえず危険はないだろう。まあ、詳しくは当人たちに説明してもらおうか。どうやら、そっちの二人の知り合いみたいだしな」

「みゆ？」

近藤の目線に気付き、タナロットが首をかしげた。

第六節 ミステリアスなお姉さんっていいよね（後書き）

やっとこさ100話まで四半分行きました。

更新が遅くてすみません。

30話ぐらいでいったん銀八先生でもやろうかと思うので、こっそり感想欄で質問募集します。

一個も来なかったら企画倒れになると思いますが（あ）
寂しいので感想&質問よろしくお願いします。

第七節〜ペットと私どっちが大事なの!?

「ほら、沖田君。シっかりして」

「コラア、テメー巫女の姉ちゃんのドコ触ってんだア!」

「いや、触られてないし」

ミヤビとシンクラヴィアに担がれる形で、沖田は榮太郎達と移動していた。とりあえず、このまま放っておいたら沖田の命にかかわるので、^{コメディアル}秘薬くを所持しているルーシイを探しているのだ。

ちなみに、沖田がダメージを食らっていたことで、敵の存在が明らかになった以上、魔力を封印しているというハンデがあるのは危険なので、ミヤビとシンクラヴィアの魔力は解放され、服装も元のメイド服からそれぞれ巫女装束とボンテージファッションになっている。

「そろそろ出くわすはずだと思っただけだなー」

榮太郎がつぶやく。正確な結果が出るような占術の術式を組むにはかなりのスペースと時間を要する。そのため榮太郎らもルーシイの確実な位置を知ることとはできない。

しかし、ルーシイとともに行動しているはずのタナロットの莫大な魔力値を基準に探せば、誤差二割以下の精度で居場所を割り出せるはずである。

「おっ? あれは……」

榮太郎は何か気づいた。白い巨大な何かが数ブロック先をうろついている。

榮太郎は迷わずそれに飛びついた。

「エリザベスう〜！」

「天誅っ！」

ドカーン！ エーネウスがデスクインでツツコミを入れる前に、エリザベスの横にいた桂が爆弾をブン投げた。

「貴様、俺の許可なくいきなりエリザベスに抱きつくなど……」

「いや、だってさ。この間読んだエリザベス擬人化十八禁同人誌のエリザベスがあまりに萌えたからつい」

「何ッ！？ そんなものがあるのか……。このバキボキメモリアルと交換してくれ！」

「はっはー、D A M E！」

「交換が駄目なら、言い値で買おう！」

「すすっ。がすすっ。

「遊戯王」っことしている場合ではないでしょう」

ようやくエーネウスがツツコんだ。

「ねエ、お兄サン、このあたりで二人組の女の口を見かけなかつたかしら？」

「ショートカットの高校生ぐらいの子と、二つ結びの小学校高学年ぐらいの子なだけど」

いつものことなので榮太郎をスルーし、ミヤビとシンクラヴィアが桂に尋ねる。

「もしかして、ネネやあいといったあの二人が……」

『あっち』

桂の説明に合わせて、エリザベスがホワイトボードで方向を示す。

「ありがとう」

「助かったわ」

ミヤビとシンクラヴィアは沖田を抱えたまま、言われたほうへ去っていった。

第七節〜ペットと私どっちが大事なの！？（後書き）

我ながらヅラが暴走しておりますね。

さて、読者の皆さんに重大発表。

虹純晶先生から、VOCALOIDをこちらの小説に参戦させる許可をいただきました！

と、言うことで結構先になるかもしれませんが、

こちらの小説にもVOCALOIDを参加させることになります。プロットの中で電脳戦の予定はあったのですが、全面的にファルチエに任せる（+ちよっとトリンシアのサポート）予定だったので、VOCALOID全員が戦力になると、かなり大幅にストーリーを増強することになり、

大変と同時に楽しみでもあります。

第八節 くそしてすべては動きだす

ルーシイはすぐに見つかった。どうやらジルとカスピアンも合流していたらしい。

「あつ、ミヤビさん、シンクラヴィアさん」

「ルーシイとタナロットさんから聞いたわよ。なんか大変なことになるらしいわね」

カスピアンとジルがミヤビとシンクラヴィアに言う。

「あれ？ タナロットは？」

シンクラヴィアが訊いた。

「それが、拓人さんも襲撃された可能性があるって聞くなり、探しに行っちゃって。とてもじゃないけど追いつけないから、そっちは鈴穂さんに任せて」

と、ルーシイの説明。なるほど。結局いつもの構図である。

「それより、ケガ人がいるの。ルーシイちゃん、確か「コーディアル」秘薬「」持ってたわよね」

「はい」

ルーシイが真剣な表情で答える。単純な怪我なら自然治癒力を増強するような魔法で何とかなる。> 秘薬「」が必要となるとよほどの

ことである。

「この子なんだけど、何かの毒にやられたみたい」

ミヤビは背中の中沖田に視線を送る。

「わかったわ」

ルーシイはポケットから透き通った小瓶を取り出す。一見、ガラスのようにも見えるが、光の反射の具合から推察するに、ダイヤモンドだろう。薬品の容器としてはずいぶん変わった材質だ。

「これを使うほどの大事なんて、久し振りだからな……んっ！」

栓を抜くのに多少力がいるらしく、ルーシイは小さく声を出し、気合を入れる。栓はきゅぽんと音を立てて抜けた。すぐにルーシイは中の液体を数滴沖田の口にそそぎいれる。

「これでもう大丈夫だと思うけど……気を失ってるみたい。しばらく安静にしておける場所があるといいんだけど……。あっ、あいちやんの家を使わせてもらえないかしら。かなり豪邸らしいし。ちょっと頼んでくるわ」

「このあたりで豪邸っていうと、酢乙女邸？」

「はい」

「またあまりバラけるとややっこしいから、私のほうからほかのみんなに酢乙女邸に集まるように連絡しておくわ。豪邸だから一発でわかるでしょ」

第八節 くそしてすべては動きだす（後書き）

あー、もう、シンクラヴィアの口調は本当に面倒です；
一度携帯で執筆したのをパソコンから投下しているので、
シンクラヴィアという名前を打つのも面倒です（あ）

次回から全キャラが合流します。

VOCALOIDは電腦戦編までちょっと待っててください；

第四章 異世界 第一節 ヤムチャも現実の基準で行ったら十分強い

酢乙女邸。最上階の大広間に、カスカベ防衛隊、銀魂世界の面々、>学園<関係者の面々が集まっていた。お互いに現況を把握できていないので、同じ部屋に集まっているが、それぞれ別のテーブルについている。

「しかし、弱ったな」

榮太郎がつぶやく。

「俺個人としては銀魂キャラ（特に神楽ちゃん）とかともうちよっとお話してきたかったからむしるグツジョブなんだけどなー」

がすつ。例により>デスクイン<が炸裂。

沖田を酢乙女邸に届けた後、いったん今の状況を報告しに>学園<に戻るうとしたのだが、なぜかシフト・ポータルが開かないのだ。

「そんなのんきなことを言っている場合じゃないでしょう」

ピーターがツツコんだ。

「今回の戦闘だけで結構ダメージを受けましたし、向こうには火界王パイモンもいます」

「ぶりぶりざえもんのこと?」

「しんのすけ君、だっけ。お兄さんたち、今大事な話してるから、

ちょっと静かにしようね」

何故か会話に混ざろうとしていたしんのすけをカスカベ防衛隊のテーブルに戻しに行く拓人。

「……とにかく、一刻も早く＜青い秘術書＞を＜学園＞に届けないといつまた襲撃されるか」

「や、そのことなら大丈夫じゃね？」

ピーターの心配を榮太郎は軽く流す。

「何でそんなことが言えるんですかっ！」

よほど不安なのだろう、ピーターがかみついた。しかし、榮太郎は動じない。

「いや、俺らだけで無理でも、『銀魂』のキャラってめっちゃ強いし」

「……は？」

「たぶんこの中では弱いほうの志村新八　あのダメガネだけどなあいつですらリーゼントの番長三人分ぐらいの強さだから！」

『まずリーゼントの番長一人分の強さがわかりませんけど』

鈴穂のツッコミが入る。

「でも、協力を頼むとしたら、こっちのこととか全部話さなくちゃ

いけませんよね。あまり詳しく話すと、記憶操作とか面倒なんじゃ」

あくまで冷静な意見のユースチス。

「記憶操作はいらねーだろ」

そこまで黙っていたエドモンドが口をはさんだ。

どういふことかと、一同エドモンドの顔を見る。

「だって、ピート兄も見たろ？ トオルだっけ？ あいつの能力。アレって>学園<で見たアレっしょ。あんなに大事件になっという公開しないって事ことあなんかしらの事情があんだろ、お互いに黙っとくってことで損はねエと思っぜ」

「なるほど、それなら大丈夫そウネ。早速……」

「あの、シンクラヴィア？」

ミヤビが会話を一回ストップさせる。

「そんなこと言うまでもないみたいけど」

ミヤビが指さした先には、勝手に『銀魂』キャラと盛り上がったる榮太郎がいた。

第四章 異世界 第一節 ヤムチャも現実の基準で行ったら十分強い（後書き）

さて、第四章突入しました。

明日更新するかはまだ未定です。

とりあえずみなさんよいお年をー。

来年は寅年です。ってことでゆすちーの詠唱の元ネタの年です（え

第二節 私の友達とあなたは友達（前書き）

皆さんあけましておめでとうございます。

第二節 私の友達とあなたは友達

「で、結局あんたらが魔法使いで、あのわけわかない民族衣装の奴とか、その仲間は青い秘術書くつてのを狙ってるわけね。それプラス、人攫いの噂は、おそらく銀魂キャラとあんたらをつぶし合わせるための罠、と」

説明を聞いたポーン・クイーンが半信半疑の表情で確認した。

「うーん、ま、実際魔法使いじゃない人のほうが多いけど、とりあえず大雑把にそんな感じ？」

ジルが肩をすくめる。ちなみに、全員がこの会話に参加しているわけではなく、タナロット、ルーシー、神楽はカスカベ防衛隊の面々と遊んでいるし、リリアン、ミヤビ、シンクラヴィアはお茶を入りに厨房と大広間の間を往復している。山崎はまだ目を覚まさない沖田に付き添っている。

「僕、魔法なんてみんなアホーウの見間違いだと思ってました」

そう述べるマタに、拓人は苦笑する。

人間は自分が理解できないことを恐れ、その恐怖から逃れるために、目の前で起きている事象をすでに知っている理論で説明しようとする傾向がある。

たとえば、科学者の中には、人魂をすべてリンの発光と考えている者がいる。実際に幽霊が原因である人魂も存在することを、拓人たち魔法使いは知っているのだが。

その心理は、知っている技術体系が一つや二つ増えたところで変わらないということか。拓人たち自らの常識を打ち破り、進んで超常の世界に身を投じるものはむしろ少数なのだろう。

「私としては、^{アホーウ}超能力が異世界の空気によるものということに驚きましたけど」

と、ファルチエ。

「ま、こっちは実際あり得ねー戦闘に巻き込まれてんだ。信じるも信じねーもねーけど。で、>青い秘術書<ってのは、しんのすけが持ってたコレのこと？」

銀時が手に持った青い本をバサバサと振る。

「ちょっと！ それ大事な本なんでしょ！ アンタ説明聞いてたの！？」

すかさず新八のツッコミ。

「いいだろ？ 多少折れ曲がったって読めなくなるわけじゃないんだし」

「ちょ、ちょっと待って、その本！」

ポーン・クイーンが銀時の手から>青い秘術書<を奪い取る。

「クイーン？ どうかしたんですか？」

「これ、もしかしてあの>アホーウの書<じゃない？」

「アホーウの書……？」

ドン・クライー出身のママですら聞いたことがないらしく、意味を聞き返す。

「ママが知らないのも無理ないわね。この本はね。ドン・クライーの暗黒時代より前に書かれたものなの。ここには全ての>アホーウ<の技術が書かれているといわれてるわ」

ボーン・クイーンの説明によると、かつてのドン・クライーでは先人たちが培ってきた超能力アホーウの技術を一冊の書物にまとめる運動があったらしい。超能力は一種の体質であり、科学や魔法のように学校の授業のような形態で学び教え、また研究することは不可能であるが、ある程度「コツ」などに共通する点があることも事実。すべてを言語化して伝達することは不可能でも、「ヒント」程度にはなっていたと思われる。

しかし、キルによってもたらされたドン・クライーの暗黒時代が明けると、技術を残すことにより、後世の人間が他のアホーウを発展させてキル以上の脅威になることがありうるのではないかといわれ始めたのだ。

ドン・クライーの人々は、>アホーウの書<を封印することにした。

「もちろん、私だってこんなただの言い伝えだと思っていただけ……」

ボーン・クイーンは言葉を切る。

「なるほど。魔法の秘術書>アツピンの赤い本<、錬金術の秘術書>エメラルドタブレット<ときて、>青い秘術書<は超能力の書というわけですね」

拓人がうなずく。

「そうになると、>青い秘術書<があんな奴らの手に渡ったら大変なことになるわね。まだドン・クラーイからダークの影響は完全に消えてないし、>デイリ・アホーウ<なんて、とてもじゃないけど全員管理できないし。ドン・クラーイの住人が>デイリ・アホーウ<の中に、彼らに協力するものが出てくる可能性は否定できないわ」

「んだよ、要はこいつがまたあいつらの手に渡らねーうちに、燃やすなりなんなりして処分しちまえばいいーんだろーが」

銀時が再び>青い秘術書<をばさばさ。

「ところが、そー簡単にもいかねーんだよなー。燃やせるんだつたら、暗黒時代が明けた時点で封印じゃなくて燃やしちゃえばよかっただろ？ バニラ・アボラス文明じゃあるまいし」

相変わらず、マイナーすぎてわからないネタを持ち出して説明する榮太郎。

「それなのに燃やさなかったってことは、魔法による呪詛か、ある

いは超能力によるそれに似た術式が施されてる可能性がかなり高いな。そんな風にバサバサやってたら呪われんじゃね？」

「ウヴオアー！」

奇声を発しながら銀時は>青い秘術書<をブン投げた。土方の顔面に命中した。

「うおっ！？ ななな、何すんだテメー！ いいいくらビビったからって、本を投げるたア何事だ！」

「べべ別に俺はビビってねーよ！ ただ手が滑っただけだよ！ おおお前こそビビってんじゃねーのか？」

「おおお俺だって平気だよ！ なんにせよ、ビビってねーならこの本はお前が持つてるよ！」

「ななななんですよ！ ビビってねーならお前が持つてるよ！」

と、>青い秘術書<を押し付けあう二人。

「佐久間さん、あまりおどかさなくてくださいよ。あの二人、ああ見えてユーレイとかのろいとかがそういうのダメなんですから」

「うん、知ってる」

トオルのツツコミに対して、榮太郎はあくまで鬼畜だった。

「全く、幽霊だ呪いだ……くだらない」

ユーリスチスが軽く机をたたく。カスピアンは幽霊も呪いも変身キヤラに存在否定されたくないだろうと思ったが黙っておくことにした。

「学園に持って帰ればなんとかできるでしょう？ とりあえず、ミカエルさんでしたっけ？ の件も相手があれだけの戦力を持っているとなると、複雑化しそうですし、シフト・ポータルの復旧を待つて……」

その時、突如ドアが開いた。ドンツと勢いよい音が部屋中に響く。

「あいちゃん！ いる？」

「おお、とうちゃん、かあちゃん、ひまわり！」

「たい！」

しんのすけが入ってきた三人を呼ぶ。

「しんのすけ、良かったここにいたのね」

「どうかしましたか、みさえさん」

桂が振り返る。

「それが、大変なのよ！ 町中のどこにも人がいないの！」

第二節 私の友達とあなたは友達（後書き）

連続更新で銀八先生投下しようと思います。

さすがに全キャラは無理なので銀八先生 ういず なるにあんとい
うことで；

3年Z組 銀八先生！ ういず なるにあん

銀八「みんな 糖という字は、人と人と人が支えあって、十字架担いでみんなで唐の国へ行きました。むかし昔のことじゃった」

エドモンド「協という字は、サーセン、やっぱ何でもないです。マジで」

新八「って、なんですかこの始まり方！」

エドモンド「いや、だって俺が行っても説得力ないと思ったし。モデルさんのに？」

新八「いや、誰もそこにツッコんでないですよ！ ぐだぐだじゃないですか！」

銀八「いいだろー別に。銀八先生なんていつつもこんな感じじゃん」

新八「何ソレ。作者は全力で大崎先生に謝ったほうがいいよ」

銀八「大体そんなことでツッコんでると身が持たねえのはお前だつてわかってるだろ？ どうした、今日は？」

新八「いや、だって。ユースチスさんが銀八先生、楽しみにしてたみたいですし」

ジル「えっ!?!? ユースチスがつ!?!?」

ルーシー「意外!?!」

桂「そういえば、さっきから教科書とノートを広げて予習しているな」

神楽「今回脚本形式だから完全にスルーされてたけどな」

ユースチス「ぎくっ」

ピーター「みんな、察してやれよ。ユースチスは『ちよつと嫌味だけど根はいいヤツの同級生キャラ』だ。学園モノだったら普通にジルと甘酸っぱい恋愛をしていた存在だろう。それなのに原作者に『学園モノをやる気はない』と地の文で明記され、挙句の果てに『ジャラ属性だぞ?』」

ユースチス「うるさいよ!?!」

エドモンド「……やっぱ気にしてたのか。気持ちは分かるけどな……」

桂「そしてエドはさしずめ隣校の女校長と禁断の」

エドモンド「くぁ w s e d r f t g y ふじこーぷ (赤面)」

銀八「はいはい、とりあえず本編一話分よりこっちが長くなっても

アレだから、ちゃっちゃと質問回答いつちゃうよー。虹純晶さんからの質問。『風間くんがどう力を発揮して活躍していくのか』だそうです。ぶっちゃけこの小説は心理戦がメインになるので、『力の発揮の機会』はそう多くない感じですよ」

新八「そんな夢のないこと言わないでくださいよ」

銀八「話は最後まで聞け。　　ですが、心理戦においてトオル含むカスカベ防衛隊の『子供の始点』はかなり重要になってくるので、能力と関係ないところでのトオルの活躍の機会はかなり多く予定しています、と作者が言っていました。

と、言うことでエドモンド。隣校の廊下に立ってなさい」

エドモンド「だからひやかすなああああああ！」

Coffee break 三年Z組銀八先生 ういず なるにあん(後書き)

協って、なんかそういう覚え方しませんか？

(だからわからないって)

第三話〜パラレルワールドってなんかカッコよくな？

敵に顔バレしていないメンバーのうち、何かがあった時にある程度即戦力になりうるメンバーで、さらにめんどくさくなった奴らとじゃんけんしたりなんかして、結局、桂・リリアン・ミヤビ・シンクラヴィアの四名が外の様子を見に行くことになった。

「本ツ当に誰もいないわねー」

ジルが溜息をつく。

「ぜ……全員家の中にいるとかじゃないんでしょうか？」

「コンビニの店員もか？」

リリアンの希望的観測を桂が即座に打ち破る。確かにコンビニももぬけの殻だ。

「ねえ、シンクラヴィア。ちょっと上から見渡してみてくれない？歩いて全部回るのも大変そうだし」

「わかつたわ」

ミヤビに言われて、シンクラヴィアは上空に飛び上がる。

ある程度の高さでシンクラヴィアが止まったのを視認し、ミヤビは声を張り上げる。

「何か見えた？」

返事は人間である桂やリアンの耳には聞こえなかったが、ミヤビには聞こえたらしい。

「なんか、遠くのほうがすごい崖みたいになってるんだって。この町って、最初からそうなの？」

「崖？ いや、春日部にそんなものはないはずだが」

関東平野のど真ん中だし。

「そうよね。山が崩れたりとかの天変地異が起きてたみたいだから、最近できたのかと思ったんだけど。じゃあ、シンクラヴィアから聞いた位置に向かって縮地を出現させるから、ちょっと待ってて」

「しゅくち？」

聞き返す間もなく、空中に円形の光が現れる。同じような住宅街なのでわかりにくいですが、その円の向こうの景色は今彼らがいる周辺の景色とは異なるものだった。

桂は以前別件で行動を共にしたロボットたちが使った秘密道具の一つ、「通り抜けフープ」を連想した。そのあと、ミヤビの説明からして効果としては「どこでもドア」に近いのだろうとも思った。

「即席だからそう長くは持たないわよ。早く通って」

「はい」

ミヤビに促されて、リアンが縮地をくぐる。桂もそれに続いた。

「あれ？ 普通の街じゃないですか」

「別段変わったところはないようだが」

リリアンと桂が辺りを見回す。

「後ろよ後ろ。縮地から出ていきなり目の前が絶壁じゃ危ないでしょ」
「よ」

ミヤビが呆れたように言う。リリアンが後ろを振り向くと。

「わわわっ!」

本当に数十センチ先が崖になっていたので、驚いて飛びのいた。

「なるほど」

桂が崖を覗き込む。崖の下は深い闇に飲み込まれていて、どうなっているのか見当もつかない。

「どうかしら?」

いつの間にか、こちらも縮地で到着していたらしいシンクラヴィアが周りの意見を求める。

「まあ、向こうには六副官級以上の魔がいるって話だし、これぐらいの地形を出現させること自体は朝飯前でしょうね。ただ、そんな

コトしたら大地震が起きてもおかしくないってこと。それなのに誰も気づかないなんてことがあるわけ」

「それにしても、まるで世界の果てみたいですね」

リアンが感想を述べた。

と、同時に、ミヤビとシンクラヴィアが固まる。

「え？ 僕、何かまずいことでも言いましたか？」

「それヨ」

「それだわ」

第四節〜パロディの半分は愛でできている（前書き）

今回から「銀玉くえすと〜銀さんが転職したり世界を救ったり」の話が出てきます。ご了承ください。

第四節くパロディの半分は愛でできている

「ええっ！ それじゃあネネたち、異世界にきちちゃったってコト？」

ネネが声を張り上げる。

「そうみたいよ」

と、ミヤビ。

「なるほどー、こりゃ一本取られたな。シフト・ポータルが開かないわけだわ」

榮太郎が言う。基準点である自分たちのいる世界が変わってしまった以上、>学園アカデミーの相対的な位置も変わってしまったのだ。

「説明を聞いたところ、春日部をそのまま複写したような世界で、容積も大したことなしか。相手の実力からして、相当の突貫工事だな。最初から予期してたわけじゃないんじゃないかね？」

「でも、これで応援呼べなくなっちゃいましたね」

ピーターがうつむく。

「>学長アスリンくの応援なしにあんな強敵、勝てるかどうか……」

「おいおいピート兄、何弱気になってんだよ」

「ぱらぱらと東武野田線の時刻表をめくりながらエドモンドが言う。

「何って……そりゃあ、佐久間さん達だって十分凄腕の魔法使いだし、坂田さん達が強いのもわかってるよ。でも、なんだかんだで今まで俺達は>学長<の側にいたから」

「>学長<の側ってか。俺は今までそんな風に考えたことはねえよ。俺は自分に都合がいいようにしてきただけ。たまたまそこにアイツがいただけだ。アイツの応援なんかいらねーよ」

心なしか、いらだった口調だった。

「お前、まさか今回の件を引き受けたのって」

「るせー！」

ピーターの追撃にエドモンドがキレた。あたりを沈黙が包む。

「つつてもよ、アレだ」

銀時がだるそうに伸びをした。

「世界の位相がどうだとか、難しいことはわかんねーけどよ。ようするに銀魂の世界にも戻れねーわけだろ？どうすんだよ俺達の武器補給」

「あっ」

銀魂の面子が小さく声を出す。

沖田のバズーカの弾や山崎のミントンのシャトルはもちろん、銀時の木刀や近藤の刀はたまに折れたりするし、なんの武器も無しにジルやみさえがうるつくのも危険である。

「おいしんのすけ。この辺に刀鍛冶」

「あるわけないでしょう」

しんのすけの答えを待たずに新八が言う。

「んだよ、探せばどの町にでも一軒はあるモンだろうが！ 武器屋とか道具屋とかフレンドリーショップとか」

「どこのゲームの世界ですか。て言うか最後のに至ってはモロにポケモンだし」

「あーっ！」

銀時と新八のポケットコミを聞いていた神楽が突然大声を上げた。

「ど、どうしたの？」

拓人が聞く。

「ゲームで思い出したネ！ アタシ、今日は風間君と一緒に遊ぶうと思って、oBee持って来てたアル！」

「おお！　でかしたぞ神楽！」

「うむ、さすがリーダー」

「ちょっとまってください。なんですか、そのoBeeって」

銀時やら桂やらが納得しているが、銀魂世界外部の人間からはちんぷんかんぷんである。アニメと漫画を毎週見ているはずのマサオも心当たりがないらしく、そんなものがあつたかと首をかしげている。

「フッフッフ、説明しよう！　oBeeというのはだな」

なぜか説明に名乗り出たのは銀魂のメンツではなく榮太郎だった。

「まあ、ニンテンドーDSソフト『銀玉くえすと　銀さんが転職したり世界を救ったり』に出てくるアイテムみたいなモンだから、アニメと漫画しかチェックしてない奴が知らないのは無理もないと思うけどな。まず、銀魂世界にはこっちの世界にあるWiiをパロつたoWeeってゲームがあつてだな、そこまではアニメや漫画のエピソードにもなつてたんだが、ゲーム版でそれを平賀源外ってキャラがさらにパロつて作ったゲーム機がoBeeってわけだ。ゲームシステムは歌舞伎町を再現した街で繰り広げられるRPGになつて、そのゲームで手に入れた装備がリアルに現れて、そのまま使えるってヤツ」

「だ、そうです。みなさんわかりましたか？」

エーネウスがまとめるが、全員微妙な表情をしている。

「とりあえず、パクリすぎということはわかりましたけどね」

ユースチスが眼鏡のブリッジを押し上げた。

「パクリじゃなくてパロディだ！ オマージユもしくはインスパイアともいうぞ！」

『それよりそのゲームは結局何なんですか？』

鈴穂にスケッチブックの角でつつかれて、やっと話題が本題に戻る。

「とは言っても、どう説明していいか……」

「さすがにこっちの世界に似たような物はあるそうにないですからね」

その時、部屋のドアがゆっくりと開いた。

「百聞は一見にしかず　実際にやって見せるのが手っ取り早いんじゃないですかイ？」

第五節　ゲームの面白さは遊んでみないとわからない

「　　沖田さん！」

ドアを開けた人物は沖田だった。

「沖田さん！　　もう大丈夫なの？」

「それがむしろ元気があり余ってるくらいなんですよ」

沖田の様子を見ていた山崎が説明する。

で、その山崎の髪型はなぜかアフロになっていた。

「山崎、お前、髪どうした？」

「イメチェンです」

「そうか」

「納得するんですか！？」

「きつと『沖田さんがこんなにくすぐきてくるとは思わなかったから、横でミントンの素振りをしてたらバズーカで撃たれた』とかですよ」

疑問符を浮かべた拓人だったが、マサオの説明になんとなく納得した。多分この人達の間では、「榮太郎が頭から流血　デスキン」並に自明のことなのだろう。

「で、実際にやって見せるってというのは……」

新八が話を再び本流に戻す。誰かがツツコまなければすぐに話が横道にそれてしまうのは、銀魂の面々にしる春日部の住民達にしる>学園アカデミー関係者にしる、いつものことではあるが。

「ゲームの内容や操作なんてなア説明書だけ読んで解るモンじゃあねエ。実際に遊んで初めて解るモンでさア」

「なるほど！　つまり、僕達がプレイして、実際に見せればいいってことですね！」

「それなら、早速コード繋いでヨ銀ちゃん！」

神楽が背中にしよっていた風呂敷包の中から、白い箱状のゲーム機を取り出した。

外見はこちらの世界のWiiとほとんど変わらない。　銀時はそれを受け取り、すぐにコードを繋ぎはじめた。

「えーと、電源コードがここで、マイク、映像、音声つと。で、最後にWii-fiに接続して」

「ここでWii-fiに繋いでも、同じゲーム持っている人がいないから通信できませんよ」

「いいんだよ、別に。ホラ、どこにも繋がってない線があるとなんか寂しいだろ？　『ハイみんな二人組作ってー』って言われて一人だけ余っちゃった子みたいじゃん、なんか」

「確かに廃線になった線路は切ねーな」

「兄貴、今鉄道の話してないよ」

意味のないエドモンドとルーシィの漫才が入ったが、なんだかんだでoBeeの配線は終了した。

どこまでも広がる広大な砂漠。いや、良く見ればそれは精巧に描かれた書き割りで、「空間」として存在するのは、学校の廊下程度のスペースのみだ。

例えるならば演劇の舞台。

舞台袖も客席もなく、ただ亜空間に存在するひとつの舞台。そこに三人の女性がいた。

「どつやら うまく いってるみたいね」

茶髪をアップにした桃色の着物の女性が言う。

「つぎは この かたなを あの しょうねんに わたせば いいのよね」

眼鏡をかけた紫髪の女性の問いに、赤い髪を左右でお団子にした少女が頷く。

「あの しょうねんが ゆうしゃの まつえいを すくっ

て くれるのね」

茶髪の女性は小さく頷き、件の少年を指すと思しき隠語を口にす
る。

「たぷーどのおきんぐ」

第五節　ゲームの面白さは遊んでみないとわからない（後書き）

書き割り世界の三人組の正体、そして「スペードのキング」が指す人物、わかりましたか？

書き割り世界の三人組は「銀玉くえすと」遊んでる方にはおそらくバレバレだと思えますが（笑）

スペードのキングの方は、「王」とか「国王」とか考えてるとおそらくわかりません。数字で考えてください（ネタばれ失礼）

第六節〜RPG後半のパワーインフレって怖いよね

「さアって、接続も終わったことですし、いっちょやりますかイ」

沖田がコントローラーを手に取る。

「しゃーねーな。やるか」

と、自分もコントローラーを取ろうとする土方だったが、見当たらずにあたりをきよろきよろと見回す。と。

「ほほーい！ ゲームだゲームだー」

「みゆっ、RPGである！ ドラゴンなクエストでファイナルファンタジーである！ 水がうめえのである！」

『タナ郎、後半の元ネタ結構マイナーだから』

「ってオイ！ 何勝手に個性的なチーム作ってんだアア！」

土方が怒涛の勢いでツッコんだ。

「何を言ってるんです土方さん。武器補給という目的はあれど、コレはゲーム、遊びなんですぜイ」

沖田が至極当然のことといったふうに戻す。

「遊びなら楽しんだ方がいい、いつもと同じ面子よりちょっと違う面子と遊んだ方が楽しい でしょう」

「そ、そうか」

意外な正論に土方は潔く引き下がる。しかし。

このチームには明らかにストッパーがいないんだが、大丈夫だろうか？

「おお！ 沖田さん沖田さん！ ゲームでおねいさんをナンパしようとしたら、敵だったみたいだゾ！」

しんのすけに言われて画面を見ると、いつの間にか戦闘シーンになっている。

画面左側にはしんのすけ、沖田、タナロットのデフォルメアイコンが表示され、右側には敵キャラが表示される。

で、その敵キャラというのは。

「姉上エエ!？」

新八が驚愕した。

「えっ、新八君のお姉さん？」

と、拓人。

「向こうの歌舞伎町を元にして作られたゲームですからね。グラフ

「イックも実在の人物を元に行っているんです」

「って、お前の姉ちゃん画像の敵キャラってまさか……」

銀時が青ざめる。妙の画像を使ったキャラクターは三人。女勇者『たえ』は本人のプレイヤーキャラだし、泉の女神に会うためには途中で中ボス『えいりあん』と戦わなくてはいけない。となると残りは。

「ラスボスじゃなーか！」

「えっ、始めたばかりなのにラスボスって」

「このゲームは恐ろしく自由度が高いんです。そんなことも起こり得ます」

「やべえよ。コレ、いきなり死んだんじゃね？」

「オイ南国娘。コイツは毒らせて消耗戦に持ち込むしかねエ。お前はなんとか防御」

「みゅっ！　喰らうのである」

「聞けよ！」

沖田の指示を無視して、タナロットは攻撃のコマンドを選択した。

が、その直後。画面に9999というあり得ない数字が表示されたかと思うと、一瞬でラスボスは崩れ落ちた。

「マジかよ」

「オイオイ、どんな裏技使ったんだ？」

「このゲームはプレイヤーの能力をそのまま反映する。いくらなんでもタナちゃんみたいな女の子が」

とか口々に騒いでいた銀魂キャラ達だったが、ちらりと神楽の方を見ると。

「案外そんなこともあるかもしれない」

と納得してしまった。

「あっ、クレジット画面入りましたね」

経験値などのクレジットが流れた後、o B e e本体の前に戦利品の薙刀や刀が現れた。

「なるほど、こういうコトなのね」

薙刀を広いあげ、スーザンが呟いた。

「どこういう仕掛けなのか、聞くのは野暮なんでしょうね」

第六節〜RPG後半のパワーインフレって怖いよね（後書き）

O B e eの仕組みについては、原作内でほとんど触れられていなかったんで、

かなりねつ造してしまいました。

次回から土方の扱いがかわいそうなお話になります。

お楽しみに（待

第六節　キャラ崩壊させるのは楽しい

そんなこんなでしばらく沖田、しんのすけ、タナロットのプレイを見ていたが、ゲームというのは見ているとやりたくなるものだ。

「いいなー、次は俺にもやらせるよー」

エドモンドが言う。

「おー、チームによってステージの得意苦手とかあるからいいんじゃない？　時間交代で。あの高橋名人もゲームは一日一時間って言うてたしよ、ずっと一チームで回すわけにもいかねーだろ」

と、銀時。

「それなら、桂さんとエリザベスさん。この後ご一緒にどうですか」

「カスピアン殿といたな。いいだろう」

『やろうやろう』

早くも次のチームが結成した。

「あの三人、なんだか息があってるね」

カスピアン、桂、エリザベスのトリオを見てマサオが言う。

「うーん、カスピアンさんって、たしかナルニアでは『航海王』ってよばれてたはずよ」

と、ネネ。

「お？ なにその『コカンがかゆいよー』って」

「航海王だろ！」

「そうそう、その王」

「というかお前はゲーム中なんだからそつちに集中しろよ」

いつも通りのしんのすけとトオルのボケツツコミ。聞いていたスーザンがクスリと笑う。

「むこうの世界の果てまでおふねで旅した王様なんだって。だから、キャプテンカツラの桂さんとは気があうんじゃないかしら」

「そっかあ」

ネネの説明にマサオは納得した。ちなみにキャプテンカツラとは宇宙海賊の変装もといコスプレをした桂のことである。

しかし、それに付け加えるようにボーちゃんが言った。

「ボ、桂さんとカスピアンさんの共通点なら、それだけじゃない」

「えっ、あの二人の共通点って……」

何かあっただろうかとネネは首を傾げる。一応、『ナルニア国物語』は通読しているのだが。

「あーっ！ ソレってもしかして ってことはカスピアンって
やっぱり」

話を聞いていた神楽が、何か思い当たる節があったらしく大声
を上げた。

そこに飲み物を配りにやってきたリリアンが、続きを言おうと
する神楽を制する。

「できればソレ、黙っておいてくれませんか？ 父さん、結構気
にしてるんです。僕が迷惑かけたコトが原因のひとつですし」

「むー、リツちゃんがそう言うなら仕方ないネ。わかったヨ」

神楽が頷く。

ネネも一端のスカンダル好きなおませ少女、そこまで隠す「
共通点」とは何かすごく気になったが、すぐに興味の対象は他に移
っていた。

次のチームが早くも結成されようとしていたのである。

「よし、じゃあ次は俺も遊ばせてもらおうかな。『銀玉くえすと』
で作中作として出てきた時から一度やってみたかったんだよな」

と言う榮太郎に、拓人が尋ねる。

「あれ、先輩、『需要に対する供給がないなら最悪自給自足するの
がオタククオリティー』って言ってますでしたっけ」

「あー、シユタイン教授、アガリレプト、ガブリエルと共同開発ならやってやれないこともなさそうなんだけどなー。あいにくシユタイン教授はキャサリンのせいで銀魂に殺意を抱いている」

シユタイン教授に殺意を抱かれるキャサリンが何者か、拓人は聞かないことにした。

「そりゃあ、俺だってケモノミミを愛する身だからキャサリンはいらないと思うし、志村妙もなんとなくミカエルを想起させて好きではないけどな」

「姉上から想起されるんですか？　ミカエルさんって天使でしたよね？」

新八が思わず食いついた。

「新八君……天使にあまり『天使のイメージ』を期待しないほうがいいよ」

拓人の目が泳ぐ。ミカエル以上にひどい天使も知っているから。

「でも他にも銀魂には萌えキャラがいるだろう。神楽ちゃんしかりたまちゃんしかりツツキーしかり」

「おっと、そんなことより、他のチームメンバーを誘わないでいいんですかイ？」

カスピアンチームに交代したらしく、手が空いた沖田がオタトークに割って入る。

「アレだけ説明できたんだ。ご存知でしょうが、このゲーム、三人同時プレイじゃないと動きやせんぜい」

「おっと、そんな仕様だったな。じゃあ、土方にエドモンド、どうだ一緒に」

土方とエドモンドは無言で頷いたが。

「萌えでも語らいながら」

「ってちよつと待てエ！」

さすがにツッコんだ。

「えっ何？ 十四郎もオタなのかよ！」

「フッフッフ、日本でのオタ文化の普及をナメるなよ！ な、トツシー」

「やっぱりソレかアア！ 俺はトツシーカウントかアア！」

「動乱編ってネ申だよな」

「なんでよりによって数ある動乱編ネタの中からトツシーぶっこ抜いてくるんだよー！」

「あの、なんですか、トツシーって」

コースチスが新八に尋ねる。

「土方さんが持つてる刀、実はいわゆる『呪われた妖刀』なんです」
「『妖刀』ですか」

「ハイ、妖刀村麻紗、手にした者をヘタレオタクにしてしまうという呪いがかかっているんです。今は押さえ込んでるみたいですけど、一時期は呪いに飲み込まれて大変だったんですよ」

正確には、呪いはプラスアルファの要素でしかなく、真撰組内の動乱が一番大変だったのだが、そこまで話す必要はないし、知りたければ勝手に漫画やDVDで確認するだろう。

「ははは、でも、ヘタレオタクは哺乳類ですからね、許容範囲ですよ」

ユースチスはLIMEに目をやる。

「いや哺乳類って許容範囲広すぎるでしょ!!」

新八のツツコミは残念ながらユースチスの耳には届いていなかった。ユースチスは二の腕に噛み付いたLIMEを引きはがすのに必死だったから。

「あたたっ、LIMEのせいとまでは言ってないだろ」

第七節 秋葉原はオタクの聖地

「オイ、チームが決まったのならそろそろ交代してくれないか？
ちようどキリがいいのでな」

まだ土方はあまり乗り気ではなかったが、桂にコントローラーを押し付けられて、仕方なく受け取る。

『はい』

のボードを片手に榮太郎へとコントローラーを渡すエリザベス。

「じゃあ、あとは頼んだ」

「いよっしー！」

同じくカスピアンからコントローラーを受け取ったエドモンドが気合いを入れる。

「チーム秋葉原、出・陣！」

「何だチーム秋葉原って！」

「確かに秋葉はオタクの聖地だが、イコールで結ぶのはどうかと思うぞ。ましてや『けいおん！』の聖地春日部のパラレルワールドにおいて」

すかさずツッコむ土方と（こちらは論点がかなりズレているが）
榮太郎。

しかし、エドモンドは不敵な笑みを浮かべ、

「チツチツチツ」

と、舌打ちができないらしく口で言うと、声を大にして宣った。

「甘アい！ お前らが見ているのは秋葉原の一面にしか過ぎない！

秋葉原って場所はだな、山手線、総武線、京浜東北線、日比谷線、そしてつくばエクスプレスつー個人的な路線ヒロインが集う場所なんだよ！

つまり、存在そのものがギャルゲ！ ビバ秋葉原！

『その発想はなかった！』

「いや、普通ないでしょそんな発想！ なんて讚える空気になってるんですか！」

ハモる榮太郎と土方に新八がツッコむ。榮太郎やエドモンドと付き合いが長い組はあきらめているのか軽く目を逸らすのみだった。

「それでやつぱり山手線は学級委員タイプ眼鏡っ娘で、一番新しいつくばエクスプレスは幼女なのか？」

「なんで土方さんが一番食いついてるんですか！」

「ソレもいいけどわざわざ擬人化してるうちはまだまだニワカだな。俺は原形でも抜ける！」

「エド君も『抜ける』とか言っちゃダメだから！　小学生未満の子供もいるんだからね！」

「えー、なにになに？　エッチなおはなし？」

「しんのすけ君は知らなくていいの！」

その後も新八のツッコミは効果がなく、かえって火に油を注いでしまったようだ。

「おっ、このゲーム鉄道も再現されてんのか。ゲキド街にも鉄道開通したばかりなのに、完成度たけーなオイ！」

「アレは西武新宿線だな」

「おー踏切鳴ってる踏切鳴ってる」

「みんな行くぞせーの！」

『萌えエエエ！』

「いい加減にしるお前らアアア！」

こんなテンションのまま、平行春日部の夜は更けていくのだった。

第七節 秋葉原はオタクの聖地（後書き）

つと、ギャグパートは一回ここまで！

次回からは銀さんとエドマンドメインで、

シリアスパートに入ります。

第五章 闇夜／＼プロローグ 少年が見た夢

深い深い沼の中。

暗い暗い闇の中。

ねっとり絡みつく泥の感触を感じながらも。

暗褐色に閉ざされた視界を見つめながらも。

彼はそこが夢の中であると知っていた。

息苦しさはあった。

ただ、本物の沼ならば、ここまで思考できるだけの酸素が脳に
行くはずがない。

そんなことをぼんやり思う。

ぐつ。何者かが彼の足を引っ張る。

ああ、奴は沼の主だ。俺を沼の底に引き込む気だ。

夢に特有のご都合主義でそんなことを理解する。

息はますます苦しく。

視界はますます暗く。

彼は自分が沼底に近づくを感じる。

そしてついに沼底に触れた瞬間。

上方からまばゆい光が降り注いだ。

彼はその光に手を伸ばす。

ゆっくりと、しっかりと。

光は彼を持ち上げる。

助かった。彼は安堵する。

ついに主の手が離れた。

ふと、主のほうを振り返る。

闇の中に佇む『彼女』は、『主』と呼ぶにはあまりに美しく、あまりにはかなげで。

『彼女』の翡翠色の瞳から流れる、一筋の泪。

彼は『彼女』を呼んだ。

「陛下！」

自分自身の声で、彼 エドモンドは夢から醒めた。

第五章 闇夜へプロローグ 少年が見た夢（後書き）

つと、シリアスパート突入です。

作者はエド×ジェイ派なのでそのつもりで！

第一節　薬物乱用はダメ。絶対。

「……んだよ」

小さく悪態をつき、エドモンドは上体を起こす。時計は二時頃をさしている。中途半端な時間に起きてしまった。

「はー、タバコでも吸ってくるか」

壁に掛かったコートの内ポケットからタバコを取り出し、寝間着のままバルコニーに向かう。隣で寝ているピーターが寝言で

「ブレイクダンス……ぷっ」

と言ったのがシュールだった。

こんな時間じゃ誰も起きてないと思っていたが、バルコニーには先客がいた。

「銀っ」

「よォ、エド」

先客、銀時はエドモンドに軽く挨拶した。

「どうした？　小便か？」

「いや。そついうお前は？」

「魔王四天王に負けたのが悔しくて寝れねーんだよ」

oBeeの話だろうか。正直自分の番が終わった後はあまり見ていなかった。

「ま、なんでもいいか。ところで」

銀時が口にくわえた物をちらと見て、エドモンドはポケットからタバコを取り出した。

「火、わけてくんねーか？」

「あア、あいにくコレはレロレロキャンディーだ」

「レロレロキャンディーから煙は出ねーよ」

「そりゃあお前、どうしようもなくレロレロしてるからだ。ホラ」

銀時は口にくわえた物を取り出す。正真正銘のレロレロキャンディーだ。

エドモンドは面喰らったような苦笑で

「そつかよ」

と返す。

「ところで、お前一態いくつだよ」

タバコはギリギリアウトに見えたので、銀時はエドモンドに確認した。

「十四」

「は？」

「十四」

予想よりさらに三・四歳幼かったので思わず一度聞き直してしまった。

「はー、やれやれ。最近のガキはしつげがなってねーなーオイ」

エドモンドは「最近」のガキではないのだが。

「ダメだよー日本ではタバコと酒は二十歳ハタチになってから！」

「……マジかよ。タバコと酒すらダメとかマジで死ぬし」

などと、さらにとんでもないことを言い出す。

「『すら』って何！？ それ以上も経験済みってこと！？ ？ ？ ？
なのお前の歳でどうやって覚えてくるんだよ！」

銀時がまくし立てる。

エドモンドはうるさいと一蹴しかけたが、銀時にふと<学長アスラン>の面影が被り、萎えてしまった。

「ん」

エドモンドが手を出し、何かを催促する。

「なんだ？ 火ならねーシタバコは二十歳ハタチになってから」

「わあってる。だからレロレロキャンディーで我慢してやる」

「はア？ 聞き分けがいいと思ったらモノ要求すんのかよ……」。

「しゃーねーな。ホレ。取っておきのメロン味だ。味わってなめるよ」

「あざーす」

銀時が懐から取り出したレロレロキャンディーを受け取り、口にくわえた。

煙が立ち上るが、結局原理は不明だ。

銀時とエドモンドはしばらく黙ってレロレロキャンディーをなめていた。

しばらくして、不意にエドモンドが口を開く。

「俺、ちょうどしんのすけぐらいの歳ン時、ある女に会ったんだ」

第二節のろけ話は犬もくわない(前書き)

サブタイトル通りの話です。
恋愛ネタ嫌いな人は注意!

第二節のろけ話は犬もくわない

「んだア、ノロケ話なら聞かねーぞ」

「るせー、大声の独り言だから反応すんじゃねー」

ぼつりぼつりと、目を合わせずに、それでもはつきりと聞こえる声で、エドモンドは語る。

「キレイな人だと思った。強く、美しく、それでいて寂しげで多分初恋だった」

「独り言でノロケかよ。随分おめでてーな」

「ノロケじゃねーよ。だってそいつ死んだし」

銀時はエドモンドの横顔を見た。

夜闇の中で、昏にも増して彼の瞳孔は開いていた。その縁を彩る空色が微かに揺れる。

「俺が殺した」

ゆっくり、断片的に、エドモンドは彼女のことを語る。

彼女が千年に渡ってナルニアを支配した女王であること。

「四人の人間の子供によって彼女の統治が終わる」という伝説を恐れてピーター達を殺そうとしたこと。

自分が彼女を裏切ってしまったこと。

彼女が争いの絶えない、壊れかけた世界で、ずっと一人で生きてきたと、後になって知ったこと。

「そんな時や、自分のコト守るんで手いっぱい、アイツの気持ちどころか、誰の気持ちも考えられなくて、結局自分が一番楽な位置にいた。」

ルー達をアイツに引き渡さなかったのだから成り行き上説得がメンドクなっただけだし、

最終的に>学長アスランく側についたのだから、ルー達の説得しなかったのに予想外にキレたアイツとの関係修復すんのメンドかったから」

最低だよなとエドモンドは自嘲する。

「 最後ン時、アイツ、泣いてたんだよ。それで初めて気づいた。俺は何をやってたんだろうって」

ふーと白煙の代わりに直径が半分ほどになったキャンディーを吐き出す。

「今になって見りゃ、向こうの気持ちに気付くタイミングだった。」

『四人の子供達』の予言が怖いなら、ルー達じゃなかったっていい、俺を殺せば兄弟は三人だ。

キルケのヤツは気付かなかったみてーだから、ネネが言った本とやらにどう書かれてるかは知らねーが」

「エド、まさか」

「初恋で相思相愛の人を行き違いで殺しちゃった　　バカ過ぎて今時三流鉄道ミステリーでも使わねーよ」

エドマンドはレロレロキャンディーを再び口に放り込んだ。

第三節 初恋は一生の思い出になる (前書き)

もうすぐ銀クレなかでみ一周年ということので、
ブログでイラストリクエスト受け付けます！

<http://graydelouis.blogspot.shinobi.jp/>

第三節 初恋は一生の思い出になる

「……そうか」

何と声をかけるべきか銀時は躊躇う。

「だから今回の事件は、俺にとつちやまたとねーチャンスなんだよ」

「どういう意味だ？ 死んだんだろ、そいつ」

「人間としてのアイツはな。でも、>学長アスランから面白い話を聞いた」

エドマンドが微かに笑った。

「>学長アスランの知り合いにな、ある魔がいるんだとよ。

その魔がある人間に取り付いたところ、その人間の中に構成された術式？ 俺は魔法使いじゃねーから詳しくはわかんねーけど。その影響で意識やら記憶やらが器の人間と融合？ したらしい」

「で？ それと何の関係が？」

「>学長アスランが言うには、アイツも取り付かせてたらしいんだよ。すげー魔族。」

人の生き死になんて語るつもりはねーけど、アイツと同じ性格やら記憶やら持っているヤツがいるなら、俺はソイツをアイツだと思っ。

となりやあ、六副官クラスの魔が、その行方知ってる可能性はあるからな」

「そうか、兄貴とケンカになった時はどんな事情かと思ったが、そういうことなら俺は止めねーよ。ヒトサマの色恋に首突っ込むのは野暮だからな」

「……サンキュ」

エドモンドはなめ終えたレロレロキャンディーの棒をポイ捨てして、屋内に戻る。

「あ、そうだ」

窓を閉めようとするエドモンドを銀時は呼び止めた。

「せっかくだからノロケられついでに聞いておこうじゃねーか、カノジヨの名前」

振り向かずにエドモンドは答えた。

「 ジェイデイス。

白い魔女、ジェイデイス」

第四節くテレビの砂嵐は幼少期のトラウマ

「っ、かー。ガラにもなくブルー入っちゃったな」

エドマンドは廊下を自室に向けて戻る。

やはりあのスナミという男の攻撃が原因だろうか。どうも思考が負のベクトルに行ってしまう。

「あー、もう！　こういう時は二度寝！　寝よう！」

誰に言うでもなく喚いていると、一室のドアの隙間から光が漏れていることに気づいた。

この部屋は確か、みんなでoBeeをやった大広間だ。

ドアの隙間から覗くとテレビ画面が点き、oBeeの起動を示すランプも点灯している。

誰か同じように寝付けずに、ゲームで時間をつぶしている者がいるのだろうか。それならせつかくだしませてもらおうかと、エドマンドはドアを開けた。

「きましたね」

部屋にいたのは一人の女性だった。

茶髪をアップにした、細身の体型の美人。年頃は鈴穂と同じぐらいだろうか。桃色の和服が、テレビ画面に薄ぼんやり照らされていた。

「……………テメエ、何モンだ？」

エドマンドが身構える。

このパラレル春日部にいる者は、エドマンドの知る者か敵の二択。そう思ったからには当然の行動だった。

しかし、落ち着いた調子で女性は続ける。

「わたしは てきでは ありません」

「じゃあ何だつて言うんだよ」

「じかんが ありません
あなたに これを」

女性が手渡そうとしているのは一振りの日本刀。

鞘に収まったその状態でも、鋭い刀身が透けて見えるかのような威圧感。滲み出るオーラに気圧され、エドマンドはそれを無意識に受け取る。

瞬間。

エドマン드의手元で紅い光が弾けた。

ネオンサインにも似た妖しげな光は、数度の点滅の後、刀に収束する。

「この かたなで ゆうしゃの まつえいを すくって
ください」

「ちよつと待て！ お前は この刀は一態」

トンッ。エドマン드의後頭部が軽く叩かれた。いつの間にかこの部屋にもう一人いた。気づいて後ろを振り向いたエドマン드의意識が急速に遠ざかる。

(エンチャント・スリープ >催眠魔法<……………)

背後にいた紫髪の忍者を視界に確認し、エドマン드는意識を手放した。

第六章 紅き刀、プロローグ 「ふたり」の夢

世界が色を忘れてしまったかのような灰色の空間。

顔のない人間がリリアンの傍を通る。

冷たい刃のような言葉を残して。

何人も何人も。

「また間に合わなかった」

「スーザンさん達が戦ってたのに」

「カスピアン王ならあんなへまはしない」

「親の七光」

「役立たず」

聞き慣れた言葉。

聞き慣れているはずだ。

しかし、それならば何故こんなに苦しいのだろう。
涙が止まらないのだろう。

何故、

俯き、うずくまり、リリアンはずっと泣いていた。

人々は彼に罵声を浴びせ、何事もなかったように通り過ぎる。

ふと、一組の足がリリアンの前で止まった。

「貴様はまだ泣いているのか」

相手の顔は見えない。見ようとも思わない。

リリアンは下を向いたまま答える。

「うるさい。あなたには関係ないでしょう」

「関係ないはずがあるか」

男はリリアンの髪を引っつかみ、無理矢理顔を持ち上げた。

リアンの目に映った男は……。

「私の顔（ ）で泣くなと言っている」

第六章 紅き刀々プロローグ 「ふたり」の夢（後書き）

ずっと出したかった「あの人」がやっと登場しました！

誰だか……わかりますよね？

しかし、クロスオーバー元様もカウントに入れると、

春日部、どれだけ多重人格者集まるんだよ；

第一節くそういえばハリーポッター最後まで読んでないわ

新八が目を覚ますと、先に起きていた者達が一騒ぎしていた。

「何なんですか？　　すぐその部屋でひまわりちゃんとか寝てるんですよ」

「あつ、新八君。おはよう」

騒いでいる者達から一步引いた位置から、山崎が新八に声をかけた。

騒ぎに参加しているのは、困り顔のエドモンドを中心に、ピーター、トオル、マタ、エーネウス、そしてボーン・クイーン。他は昨日の精神的な疲れもあってか、身体的には睡眠を必要としない神魔すらぐっすりである。

騒いでいるというよりは、クイーンがエドモンドに向かって一方的にまくし立て、残りの四人が中立といった様相だ。

「山崎さん、一態何があつたんですか？」

「エドモンド君が昨夜、知らない女性から刀を貰ったらしいんですよ」

「知らない女性……って、敵かもしれないじゃないですか！」

「そのコトで今モメてるどころ」

山崎が言うには、例によってクイーンが危険かもしれないと捨てることを提案。

しかしエドモンドは刀を受け取った際に頼まれたことがあると拒否。

ファルチエに解析を頼めば危険な術式の有無を確認できるのではとエーネウスが提案したものの、超能力アホウに対しては効果がないため膠着状態、ということらしい。

「なんだから、ハリーポッターにそんな展開ありませんでした？」

「新八君の口からその言葉が出るとは思わなかったよ」

ああなったクイーンを説得するのは無理なので、新八は山崎と一緒に離れたところから見ていることにした。

「ところで、その刀をわたした人ってどんな人だったんですか？」

トオルが尋ねる。

「えっ？」

「刀をわたしたことに理由があるなら、僕達の誰かが会ったときに聞くしかないでしょう。そのためには、相手がどんな人か知っておかないと」

首を傾げるマタにトオルは説明した。

「なるほどなー」

「それで、どんな人だったんですか？」

「うーん、着物を着た美人さんだったぜ」

エドモンドは抽象的に説明した後。

「そつだ！　　ちょうど昨日のゲームに出てきた魔王そっくりだ！」

「姉上エエエエ！？」

新八が叫んだ。

第一節くそういえばハリーポッター最後まで読んでないわ(後書き)

えーと、クロスオーバー元様のハリーポッターオマージュのシーン、ネタとして使ってしまったてすみません。

ちょっとトラブルがあったようなので(私が流れ着いたのはトラブルより後でしたが)、

不快でしたらそのネタのみ消しますので、ご連絡ください；

第二節 兄弟で同じおもちゃを買つとどっちがどっちかでケンカする

「ちょっと、なんでソレを早く言わないのよ！」

「はア！？ 聞かぬーお前が悪いんだろうが！」

「お、お前つて何よ！ こう見えてもアタシのほうがあなたよりずっと年上なんだから！」

「トシくつてるだけで威張るんじゃねー！ キルケかテメエは！」

「二人とも少し落ち着け！」

ピーターがクイーンとエドマンドの不毛なケンカを止めた。

「で、その人が新八君のお姉さんつてコトは、この刀は安全と思つていいんだな」

「そうですよ！ まさか姉上が敵に味方するわけありませんし」

「でも、お妙さんがこつちに来ているなら、なんで僕達に何の連絡もないんだろう？」

マタが首を傾げる。

「さあな。いろいろ事情があるんじゃないかねー？ 『時間がない』とか言つてたし」

「なんで時間がないかは聞いてないの？」

「あー、その後女忍者に気絶させられちゃったからな。悪い、聞いてねーや」

「女忍者？」

「こっちは紫髪で、眼鏡をかけたスタイルのいいネーチャンだったな」

「ソレ、さっちゃんさんじゃないですか！」

エドマンドが述べた特徴は、知り合いの女忍者くのいち、猿飛あやめのものと同じだ。

「そっちも知り合いなら、まず心配ないだろ。誤解が解けてよかったな、エド」

「おう」

「でも」

おかしい。いくら事情があっても、妙があやめと行動するだろうか？

妙は特別敵を作るタイプではないが、合わない相手とはとにかく合わないタイプであることは、弟の新八が一番よく知っている。

そしてあやめは近藤、阿音などとともにその合わない相手の代表的人物だ。

しかし、新八がその違和感を口にする前に、その話はつやむやになつてしまった。

土方が起きてきたのだ。

「おう。山崎。もう起きてたか」

「副長！」

「悪いが総悟起こすの手伝ってくれねーか？ アイツの寝言のせいで朝から」

土方の発言が急に尻窄まりになる。

彼の目線の先には、件の刀。

「お前、いつの間に」

「へ？」

「いつの間に俺の刀を持ち出した？」

「ちょっと待ってください。土方さんの刀って、妖刀村麻紗ですか？」

「副長、いくらなんでもそんな簡単に持ち出せるはずないでしょう。呪われた刀なんですよ」

「第一、勘のいいあなたのことだから、夜中に誰かが刀を持ち出したりしたら気付くでしょ」

「つつたつて、俺が自分の刀見間違えるわけ」

新八、山崎、クイーンが口々に「そんなわけがない」と否定する。まだ釈然としない土方だったが。

「だいたい、土方さんの刀なら、今も腰にさしてるじゃないですか」！

『あ』

トオルの一言が決定打だった。

「全く、何が『自分の刀を見間違えるわけがない』よ！間違ってるじゃない！」

「でも、ちょっと見てください。ホラ」

それ見たことかという調子のクイーンに、トオルが二本の刀を比べて見せる。

土方が見紛うのも無理はない。二本の刀は寸分違わずそっくり

だったのである。違いといえば、土方のほうの刀には柄にマヨと思われる染みがうつすらついていることくらいだ。

「同じ刀、ですか」

村麻紗はヒキニートを斬り殺したことにより妖刀と化した元はただの刀。同じく銀魂世界で妖刀と恐れられた紅桜などと違い、同じ型の刀が存在することに不思議はない。

しかし、何故「妙が」「村麻紗と同じ刀を」「エドマンドに渡したのか。

依然として謎は残る。

しかし、その謎をゆっくり考えている時間はなかった。

鋭い音とともに窓ガラスが割れたからだ。

「きゅっ」

「ほにゃー!」

「どづした!?!」

『な』『に!?!?』

物音に気付いて、寝ていた者達も続々と起きてきた。

「というか最後のエリザベスと鈴穂さん打ち合わせしたでしょ絶対」

新八のツツコミはさておき、割れた窓から羽が生えた小型の人間のようなものが多数侵入してきた。

「なんだありゃ」

寝ぼけ眼で銀時が尋ねる。

エーネウスがそれに答えた。

「下級魔族、ピクシーと思われませう」

「ピクシーね。じゃあアレか、ピッピの進化系か」

「ボケてる場合かアア！」

第二節〜兄弟で同じおもちゃを買つとどっちがどっちかでケンカする（後書き）

一月ぶりぐらいの更新になっちゃってすみません。

早くVOCALOIDを出したいなーと思っているのですが、
なかなか思うように進まず……。

こいつら倒したら出そうと思うんで、楽しみに。

第三節〜またデジモンの再放送やらないかな（前書き）

早くボカロを出すために一気に加速中！

第三節 再びまたデジモンの再放送やらないかな

「まいったな、もうしばらく持つかと思っただが、もう結界破られちまったか」

榮太郎が頭をかく。確かに上空の結界にぼつかりと穴が開いている

「拓人とファルチエは結界の修復を頼む！ ユースチスは進化して二人を上まで乗せていってくれ！ シンクラヴィアとマタちゃんは援護を！」

「わかりました」

「了解です」

「わかッタわ」

「わかりました」

「今どさくさに紛れて『進化』って言ったでしょう」

他の四人の返事のとに、ユースチスの軽いツツコミ。しかし、言っている場合じゃなかったと思い直したのか、すぐに詠唱に入る。

「偶因狂疾成殊類
さいかんあしよつてのがあるへからず

災患相仍不可逃

こたにぢはむうがたれかあへてきせんや

今日爪牙誰敢敵

こんにちせいはせともにあひたかりき

当時声跡共相高

ども)

一我為異物蓬茅下(われはいぶつとなりてほづぼづのもとにあれ

きみはすでにえふにのりてきはじこつなり

君已乗? 氣勢豪

このゆふべけいせんめいけつにたいし

此夕溪山对明月

「いきましゅよー!」

詠唱が終わる前に窓から飛び降りる。

「不成長嘯但成? ちよこせうをなさすしてただかづをなすのみ ぐルアアア!」

光と雄叫びとともに、一匹の龍が空に舞い上がった。

「さて、俺達はもう中にいる連中の始末だ」

「始末って、どうやって……」

榮太郎に新八が尋ねる。

「ちつつちつつ、俺が昨日ただ寝てたとても思ってるのか? ちやんと策は練ってあるぞ」

榮太郎は白いリボンを近くにいた者それぞれに投げた。

真っ白と思われたそれには、手元で見ると複雑な幾何学模様がいくつも印されている。

ちょうど鈴穂が髪につけているリボンのようだ。

「メデューサの封印術式の簡略版だ！ それを武器に結べば、敵を封印できる。ピーター君達の武器はデフォルトで逆召喚術式入ってるから使わなくても大丈夫だ」

「わかりました！」

新八が木刀にリボンを結わえる。

「じゃあ、屋内の敵は俺達で！ 鈴穂さん、沖田さん、山崎さん、スーザンは外の敵を！」

ピーターが指揮をとる。

「よし、ついてこい」

「はい！」

沖田がバズーカにリボンを結んだ。

>ワルプルギス<と>アイギス<を持った鈴穂と、弓矢を準備したスーザンが続く。

その時、窓からピクシーの新たな集団がなだれ込んできた。

「拓人さん、手間取ってるみたいですね」

「どうすんだよ、この数」

「あの……よろしければ、僕が行きますけど……」

トオルと銀時に答えたのは、リリアンだった。

第三節〜またデジモンの再放送やらないかな（後書き）

考えてみれば、タイトルにボカロの要素が全く入ってないんですね。

VOCALOID参加したあたりから「踊る」「のるところを」「歌う」
に変えようかな？

いや、VIPPELOIDのみとはいえUTAも出すから「歌う
てUTAう」か……。

第四節〜テトをんじゅじっせいのめんとしー！(前書き)

エド君も前世祭りだねっ！

第四節〜テトさんじゅっさいおめでとっ!

「リリアン、いつになく強気じゃないか」

カスピアンが驚く。

「アハハ。ちょっと、ね」

リリアンは笑ってごまかす。そして、ピクシーの一団へ向き直り、脇にあった薙刀を手にとり、リボンを結わえた。

「はああああっ」

リリアンが深く息を吐き出すと、漆黒の気が薙刀を膜のように覆い、その切っ先の形状を変化させる。

薙刀は漆黒の槍となった。

「よし、と」

その槍でリリアンはピクシーの大群に突撃する。

数発の鋭い衝き。ピクシーのぬいぐるみが三つ、床に転がった。

「みゅっ、封印成功なのである！ リリアンは強いのである！」

「あっ、どどどどういたしまして！ ここ光栄です」

タナロットに褒められ、リリアンはどきまぎする。女好きの癖、

根がお人よしなのだ。

「リリアンさんは槍使いなんですね」

と、トオル。

王族というと剣士のイメージが強いので、正直意外だったのだ。

「ああ、いや、そういうわけじゃあないよ」

リリアンが答える。

「ただ、『僕』が使い慣れた武器だからね」

その時、数匹のピクシーがみさえに襲い掛かった。

「危ない！」

すかさずひろしが何かをかざす。

ピクシー達はぬいぐるみとなり墜落した。

「あなた！」

「何を使っただんですか？ かざしただけで攻撃できる武器なんて」

ピーターが尋ねる。民間人がそんな武器を持っていることに驚いた。

「ふっ、これだ」

ひろしが高々と掲げた武器は。

臭い靴下だった。

「……え」

ひろしからはかなり距離があるのだが、ミヤビが顔をしかめる。人間に比べて嗅覚がいいのだ。

「靴下でもいいのですか？」

「うーん、一応沖田のバズーカや山崎のミントンも考えて、『リボンをつけた武器及びそれから発せられた物質』に効果範囲を指定したからな」

エーネウスの間に榮太郎が答える。

臭いも靴下から発せられた微粒子なので、適用範囲内らしい。

「でも、それで実際に封印するんだったら、よっぽど臭くないとなあつ、ひろしさんがリボン外すまであまり寄らない方がいいな。俺達も封印されちまう」

榮太郎が手でおいを仰いだ。

ひろしの靴下でかなりの数を減らせたはずだが、一向に視界に入るピクシーの数は変わらない。

それだけ多くのピクシーが外から侵入しているということだろう。

「チツ、このままじゃ埒が開かねー!」

「武器の補充が効かなくなったらまずい! 俺、土方さん、近藤さん、佐久間さんで武器庫に向かいますよ!」

と、ピーターの指示。

呼ばれた者達が武器庫にしている部屋に向かう。

「じゃ、新八、神楽、トオル、エド! 俺達はoBeeだ! 残り
は入ってくる奴らを止める!」

「おうよー!」

「はい!」

「アタシのoBeeに手出しはさせないアル!」

「神楽ちゃん、何かがちよっと違うよ!」

万事屋トリオとエドマンドが続いた。

第四節〜テトさんじゅじゅいっせいのめんどじゅー！(後書き)

次の話あたりから、いよいよVOCALOID参戦です

第五節「しめんそか」「いんがおうほう」「ってひらがなだとカッ」つかねーよ

今日は二話連続更新行きます！

それにしても、なぜかサブタイトルにポケモンとかデジモンのネタが多いな……

第五節「しめんそか」「いんがおうほう」「ってひらがなだとカッコつかねーと
「がアアアっ！」

ユースチスの尾に数匹のピクシーが噛み付く。痛みにユースチスが悲鳴を上げる。

「主人！^{ましゅたー}大丈夫でしゅか？」

「がウツ」

L I M Eの問い掛けにユースチスは頷く。

「頑張ってください！ もうすぐで修復が終わります」

拓人がユースチスを励ます。人間には聞き取れないが、その間もファルチェは高速詠唱を止めていないのだろう、反応がない。

「そこまでだよっ」

だいぶ狭まってきた結界の穴から、ひとつの影が滑り込んだ。

「アーネスト・シグルズ！」

「僕はファフニルに用があるんだ。邪魔しないで」

アーネストは不敵に笑った。

ザクツ！ アーネストの剣がユースチスの皮膜を貫通した。

「グああ　ア！」

ユースチスはバランスを崩し、地面に墜落する。

「ぐ、ぐるっ」

「拓人しゃん、ファルチエしゃん！　こっちはLIMEと主人ましゅたーに任
しえてください！　お二人は結界の修復を」

「それじゃア、行クワヨ」

シンクラヴィアがファルチエを持った拓人を抱え、結界の穴に向
かって飛翔する。

ちょうどその時、緑色のクリーチャーが穴を通過したことにその
場にいた誰もが気づかなかった。

書き割りの世界。

茶髪の女性、紫髪のくのいち、赤髪の少女が佇んでいた。

「ぐねむりんの まりよくばを かんちしたわ」

「あねご　こごは　もう　きけんある」

くのいちと少女に言われ、女性はため息をついた。

「われわれも　ここまですか　せめて　この　せかいの　そと
に　でられれば」

「げかいへの　てんそう　じゅつしきは　われわれを　てんそう
するには　ふじゅうぶん　だからね」

「げかいでも　ここでもない　ところが　どこかに　ないあるか」

「まっつて」

くのいちが語気を強めた。

「それよ」

第五節「しめんそか」「いんがおうほう」「ってひらがなだとカッ」つかねーよ

次話からいよいよVOCALOID参戦です！

タイトルも「銀クレ！ ストームを呼ぶ！ 歌ってUTAう！？」

ナルニアあかでみい」に変更します！

電脳編 STAGE 1 ゲキド街の異変・MP3 (前書き)

と、言うことでいよいよVOCALOID参戦です。
とりあえずクリプトン社製の六人を出してみました。

電腦編 STAGE 1 ゲキド街の異変・MP3

「ねえ、リン。マスターのことなんだけど……」

「またその話？」

少年の問い掛けに少女が答える。山吹色の髪、大きな碧の目、小さな背丈。瓜二つと言ってよい容姿だ。

少年の短いくせ毛と、少女の良く整えられ毛先のカールした肩にかかる長さの髪、少女が頭頂部につけた白く大きなリボンといった小道具の違いが無ければ、見分けがつかない。

0と1の電子の世界。インターネット情報の海の片隅に、ぽっかり浮かんだ小さな街。

一部の人々はこの街をこう呼ぶ　ゲキド街。

この街の片隅に、双子の少女と少年、鏡音リンとレンは暮らしていた。

もちろん、インターネットは生身の人間が存在できる場所ではなく、二人もまた人間ではない。

彼らは歌を歌うためのソフトウェア、ボーカーロイドVOCALOID。もつとも、最近はおトークからドラマまで、仕事を選ばない電脳芸能人と化しているが。

「昨日はマスターも久しぶりにクイーンの目から逃れられる日だったんだし、私たちのことなんか忘れて、しんのすけ君達といっばい遊んで、まだぐっすりでしょう」

二人の会話に割って入ったのは、同居人のMEIKO。

いわゆるボンキュッボン体型を露出の多い赤い服で包んだ、短い茶髪の女性だ。

そこに、一人の男性が飛び込んできた。

「みんな！ 大変だよ！」

「か、KAITO兄さん！」

「どうしたの？」

リンとレンが尋ねる。

KAITO 青い髪と同じ色のマフラーに、白いロングコート
の男が答えた。

「僕のアイスが当たりだったんだ！」

全員ずっこけた。

「なによ！ 驚かして」

「もう！ マスターと連絡が取れない時に」

「このバカイト……」

怒るリンとレンに、呆れるMEIKO。ゲキド街の日常風景である。縁側で寝ているピンクの生首。のような蛸のような不思議生物、たこルカが欠伸した。

そこに。

「みんな！ 大変っ！」

と、また別の少女が飛び込んできた。

長いエメラルドグリーンツインテールに、一風変わった灰色のシャツ。なぜか手に持った長ネギ。

彼女の名は初音ミク。VOCALOIDの中でトップの人気を誇る売れっ子だ。

「KAITO兄さんの次はミク姉さん？」

「どづしたの？」

「わかった、ネギが当たりだったんでしょ」

「アンタと一緒にしないの！」

四人が口々に質問した。

「とりあえず、外を見て！」

ミクに促され、四人が外を見る。たこルカもちよこんとリンの頭に飛び乗る。(リンはレンとともにこの中で最も背が引く、リボンに掴まることもできるので、リンの頭上はたこルカの特等席だ)

「な、なんだ！？ アレ」

真っ先に声を上げたのはレンだった。

ゲキド街の空に向かって、場違いな巨大建造物がそびえ立っていた。

電腦編 STAGE 1 ゲキド街の異変・MP3（後書き）

すみません、ルカはたこルカですw

電腦編サブタイトルの付け方はとりあえず「MP3」縛りっでこ
とで

第六節 日本刀は妖しく光ってナンボ

「銀！ そつちは大丈夫か？」

「へっ、ナメんなよ！ トオルは？」

「平気です！」

「オイ新ハイ！ 全然数減らないアルヨ！ オマエサボってるんじゃないアルか！！」

「サボってないよ！」

oBeeを守っている五人が口々に言う。

しかし、室内の敵の数は一向に減らない。むしろ増えている。

敵がoBeeを狙っていることは明らか、だが、それにしても敵の増え方が尋常ではない。

何かあるのか。そう思った矢先、ピクシーが一斉に入口周辺から飛びのいた。

「なんだ？」

銀時が攻撃の手を緩める。

「うっふふ」

「おなーりー」

「おなーりー」

「グレムリン様のおなーりー」

ピクシー達がザワザワと喋る。

すると、ドアの向こうから、ちょうどシロと同じくらいの大きさの魔物が姿を現した。

蝙蝠のような皮膜、漆黒の一角を持った異形の魔物。

「なんだ、お前は！」

ピクシーとの位の差を察し、エドモンドは手首に巻いていたリボンを刀につけ替える。

素手でやれる相手じゃない。

「へへへ、俺はグレムリン。機械メカの破壊が専門の魔族さア！」

「機械の破壊………！」

敵の狙いがoBeeであることは明らかだ。

「面白エ、俺が相手になってやるぜ！」

エドモンドがグレムリンの前に立つ。

「エドさん！ 僕も手伝いますよ」

「いや、俺一人でやらせてくれ。ちょうど刀の切れ味も確認しときたかったところだ」

手伝おうとする新八を退けて、エドマンドは刀を抜いた。

すると、刀身から赤い光が放たれる。

赤銅色、深紅、いや。

『蘇芳色の』村摩紗。

「こ、これは？」

「マヨラーと同じ刀のはずなのに、色が違うアルな」

「あー、アレだ。ほら。良くケータイとかであんじゃん。同じ機種で色違いのヤツ」

「そんなわけないでしょう。イヤですよ、そんな妖刀」

銀時達は完全に蚊帳の外で傍観していた。

しかし、いつまでもそうしてもらえない。

「キキーツ！」

背後から襲い来るピクシーを、新八の木刀が跳ね返す。ピクシーのぬいぐるみはそのまま木刀に弾かれて宙を舞い、o B e eの前に落ちた。

第六節〜日本刀は妖しく光ってナンボ（後書き）

グレムリンのキャラがいつぞや書いた一次キャラのフォースと同じじゃねえかorz

あとエドマンドの前世ネタをどこまで描写すべきか困ってる。
学長とか榮太郎の正体にもつながってきちゃうからなあ…

第七節 井中桃ちゃん萌え（前書き）

久々の更新です。多忙のため更新とまってすみませんでした！

そしてなんだこのサブタイトルwwww

ネタわかる人いるのかwwww

第七節 井中桃ちゃん萌え

キーン！ グレムリンの爪をエドマンドが刀で受け止める。

「くっ……！」

使い慣れない刀が手から抜けそうになるのをどうにか押さえる。

「おいおい、そんなことで俺を止められると思ってんのか？」

「るせー！」

嘲笑うグレムリンに、半ば強引に斬り返すが、ひらりと交わされる。

「くそっ！」

「どうした？ 刀に振り回されてるようじゃあねーか」

悔しいけど相手の言うとおりだ。新八は思った。

刀は長さを持った鉄の塊。その重量に振り回されずにまともに扱うにはかなりの鍛練を要するのだ。

やっぱり、助けたほうが。そう思い、キルクを発動しようとするトオルを銀時が制する。

「やらせてやれ。アイツも侍だ」

「侍って エドさんはイギリス人ですよ」

銀時はトオルに微笑みかける。

「何も和服着て刀ブン回してるヤツだけが侍じゃねえ。守りたいもののために必死こいて頑張るヤツは、誰であるうと侍だ」

刀の重さに苦戦しつつも、エドマンドはグレムリンとoBeeの間に回り込み、寄せつけない。

そもそもエドマンドは強豪ラグビー部員だ。ブロックなら完璧である。

「なかなかやるじゃねえか」

「喋ってる余裕なんかあんのかよー！」

グレムリンの隙をエドマンドは見逃さない。すぐに大きく踏み込む。

「かかったな！」

(フェイント！？)

エドマンドが気付くと同時に、グレムリンは魔弾カスバルを手元に生じさせた。

「本当はじっくり分解したかったんだが、一気に決めさせてもらうぜ！」

グレムリンがほくそ笑んだその時。

エドマンドの刀が閃光を放った。

それだけではない。光の中で刀身がうごめいたのだ。

鉄の塊ではありえない、まるで獣が威嚇のために身を震わすような動き。

光が収まった時、エドマンドの刀は いや、それはもはや刀ではなかった。

唸りをあげる蘇芳色のチェーンソーが、>魔弾<を弾いた。

「何だと!?!」

銀時が某死神漫画よろしく驚く。

「刀が 変わった」

「チツ、運が良かったな」

グレムリンが次の>魔弾<カスバルを用意する。

が、ふとoBeeの方に目をやると、急に>魔弾<を収束させた。

この時、誰かがoBeeに注目していたら、w i - f i通信中を示すランプの点灯に気付いただろう。

「逃がした、か」

「は?」

「じゃあ、俺はもうここにいる意味はねーな」

グレムリンはドアの方に引き返す。

「待つアル! エドとちゃんと決着つけるヨロシー!」

神楽がグレムリンを引き止めようとした。が、グレムリンが指を

ならずと、激しい頭痛が神楽達を襲った。

そうだ。グレムリンはここに到達する前にタナロット達を敗っているはずなのだ。何の隠し弾も持っていないわけがなかった。

迂闊だった。

頭痛が治まりました動けるようになった時には、すでにグレムリンの姿は室内になかった。

第七節 井中桃ちゃん萌え（後書き）

今回の襲撃目的は電腦編につながる、と、思います
どうつながるかは皆さんの目で確かめてくださいw

第八節 敵をも守ってこそ本当の正義

「……逃がしたか」

「o B e eは諦めたみたいですけど、何だったんでしょうね」と、銀時と新八。

「うううう、銀ちゃん、アタシまだ頭がガンガンするアル」

「そうか。それでももう少しマシになるんじゃないか？」

言われて銀時に殴りかかる神楽の様子を見てひとしきり笑ったあと、トオルはふとエドマンドに言った。

「でも、エドさん。すごいじゃないですか。あのタイミングで刀の形をかえちゃうなんて。やっぱり魔法ですか？」

「いや、俺は魔法使いじゃねーし。ただ……」

エドマンドがo B e eの方に目をやる。

「守れてよかった」

「なにもあんなムチャして」

o B e eを守らなくなつて。その言葉をトオルは飲み込んだ。

エドマンドの目線の先にあるものがo B e eではないことに気付いたから。

エドマンドが見ていたものは、o B e eの前に転がるピクシーのぬいぐるみだった。

トオルの背筋に冷たい汗が流れた。

じゃあ、エドさんはあれほどの力を、『敵』を守るために？

昨晩は土方や榮太郎とオタトークではしゃいでいた気さくなお兄さんが、とんでもなく恐ろしい化け物に見えて、トオルは身を震わせた。

「おーい、トオル？」

『化け物』に声をかけられ、トオルは我にかえる。

「どうした？ 急に黙って」

「な、なんでもありません」

「そうか」

今は気のせい。トオルはそう思おうとした。エドマンズの笑顔は、昨日の気さくなお兄さんそのままだったから。

しかし、冷たい恐怖は心の奥に蟠ったままだった。

第八節 敵をも守ってこそ本当の正義（後書き）

なんか、今回はいい話にしようとしすぎたような……。

次回でこの章も最後、次の章ではエドマンド・ユースチスの能力の秘密が明らかに……？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1449g/>

銀クレ！ ストームを呼ぶ！ 歌ってUTAう!? ナルニアあかでみい

2010年10月9日12時36分発行